

平成 29 年度 修士論文

香港における日本製テレビドラマの受容について  
——1970 年代を中心に

提出：平成 30 年 1 月 10 日

指導教授：佐々木睦教授

人文科学研究科 文化関係論（中国文学）

学修番号：16870101

周 舒静

## 目次

はじめに	p. 1
------	------

第 1 章 先行研究及び問題提起	p. 3
------------------	------

第 2 章 香港テレビ放送発展略史	p. 5
-------------------	------

2.1 ラジオ放送史	p. 5
------------	------

2.2 麗的電視	p. 6
----------	------

2.3 無線電視	p. 7
----------	------

2.4 その他	p. 8
---------	------

第 3 章 輸入された日本製テレビドラマ	p. 10
----------------------	-------

3.1 スポ根ドラマ	p. 10
------------	-------

3.2 特撮ドラマ	p. 12
-----------	-------

3.3 時代劇	p. 14
---------	-------

3.4 その他	p. 16
---------	-------

3.4.1 ホームドラマ	p. 16
--------------	-------

3.4.2 青春ドラマ	p. 18
-------------	-------

3.4.3 探偵・刑事ドラマ	p. 19
----------------	-------

第 4 章 香港における受容状況	p. 21
------------------	-------

4.1 独特な香港題名と不自然な紹介文	p. 21
---------------------	-------

4.1.1 香港式の訳名	p. 21
--------------	-------

4.1.2 不自然な紹介文	p. 22
---------------	-------

4.2 視聴者の反響	p. 24
------------	-------

4.2.1 視聴率ランキング	p. 24
----------------	-------

4.2.2 視聴者からの投書	p. 26
----------------	-------

4.3 香港現地の放送事業に与えた影響	p. 29
---------------------	-------

4.3.1 剽窃の疑い	p. 29
-------------	-------

4.3.2 日本製テレビドラマと香港「喜劇王」周星馳	p. 30
----------------------------	-------

4.3.3 その他	p. 33
-----------	-------

4.4 日本ブーム	p. 34
-----------	-------

4.4.1 日系企業の香港進出	p. 34
-----------------	-------

4.4.2 日本関係の芸能ニュース	p. 36
-------------------	-------

4.4.3 日本語学習ブーム	p. 37
----------------	-------

おわりに p. 40

注釈 p. 42

参考文献 p. 48

謝辞 p. 52

# 香港における日本製テレビドラマの受容について

## ——1970年代を中心に

### はじめに

#### 1 研究テーマについて

1963年、「麗的映声」<sup>[1]</sup>が日本製テレビドラマ『武士道』<sup>[2]</sup>を放送した。これは香港に輸入された最初の日本製テレビドラマであった。これを契機に、香港の各テレビ局は数多くの日本製テレビドラマの輸入が始まった。これ以降、長期間にわたり、日本製ドラマは香港で絶大な人気を博した。それだけでなく、視聴者により日本製テレビドラマを気軽に楽しんでもらうために、近年では日本製テレビドラマ専門チャンネル「日劇台」(Japanese Drama)が開設された<sup>[3]</sup>。

本論文は『明報』に掲載されている主たる番組表を研究資料とし、また『香港電視』を中心に当時の芸能誌も参照する。これらの番組表に掲載されている日本製テレビドラマの代表的な作品をジャンル別、内容別に整理し、これをアプローチの一つとして、日本製テレビドラマの受容史の全体的な流れを見通したい。さらに、香港の社会構造の転換や日系企業の香港進出などを手掛かりに、日本と香港の交流史に着目し、日本製テレビドラマの香港における人気の秘密や、輸入された日本製テレビドラマのジャンルの転換、および香港の放送文化に与えた影響について究明したい。

#### 2 『明報』と『香港電視』

まず、本論文の主要資料と位置付ける『明報』と『香港電視』について説明したい。『明報』は1959年に查良鏞と沈宝新によって創刊された日刊新聞紙で、世界中の中国語圏における認知度が高い<sup>[4]</sup>。情報の通達がまだ発達していない60、70年代当時、市民たちは日頃から新聞紙を通じて、テレビでどのような番組が放送されているのかを調べていた。そのため、『華僑日報』<sup>[5]</sup>や『星島日報』<sup>[6]</sup>などのような有力な新聞紙の多くが番組表を掲載していた。例えば、『華僑日報』は早期の代表的な新聞紙で、「今樂府」という名で毎日、その日の番組を掲載している。そして、テレビ番組だけではなく、ラジオ番組も含まれる。これに対し、『明報』も毎週の番組表を掲載しているが、概ね日曜日の第9面「毎週電視」に、日曜日から一週間内の各チャンネルが放送するテレビ番組を掲載している。ラジオ番組表は載せていない。しかし、載せているのは番組名だけで、日本関連の番組と香港本土の番組をはっきりと分けていない。

次に、『香港電視』を簡単に紹介する。『香港電視』は1967年に電視企業有限公司によって創刊された「無線電視」のテレビ雑誌である。1997年に『TVB 週刊』と名前を変えた。創刊号の値段は20香港セントで、毎週水曜日に発売された。表紙にはほぼ毎号旬な芸能人の写真が掲載されている。内容は様々で、タレントの記事や視聴者からの投書、映

画の紹介、一週間に放送するドラマの粗筋などで、時には漫画と小説の連載をも挟んでいる。その中でも、最も比重を占めているのが「麗的電視」と「無線電視」の一週間分の番組予告表である。『明報』の番組表と異なり、『香港電視』の番組表は「日語長片（片集—〇〇〇）」という形で、どの国のドラマなのかを明示している。それだけでなく、ドラマの簡単な紹介文をも含むので、分類する有力な事実の根拠を提供できる。

### 3 漢字表記について

本論文では、本文と注釈における映画とテレビドラマの題名と原文の引用に関しては、香港で使われている繁体字で表記する（例：『劍道羣英』『國產凌凌漆』『輕鬆』）。それ以外、例えばテレビ局の局名、書名、論文名などは常用漢字で表記する（「麗的呼声」）。ただし、巻末の参考文献一覧においてはその限りではない。

## 第1章 先行研究及び問題提起

日本製テレビドラマについての研究は様々な分野において行われているが、香港における受容状況についてはあまり多くなく、その多くは90年代以降の受容状況を中心としており、70年代についての研究はほぼなされていない状況である。日本における先行研究として以下の二点が挙げられる。

①谷川建司・王向華・呉咏梅編『越境するポピュラーカルチャー リコウランからタッキーまで』所収王志恒「日本のドラマと香港の社会」（第7章）（2009年）

日本製テレビドラマが香港で受け入れられた経緯と日本製テレビドラマの香港における盛衰の原因、この二つの視点から日本製テレビドラマの香港における受容史を論述した。社会、業界及び文化といった視点から60、70、80、90年代の四段階に分けて、大ヒットした日本製テレビドラマを分析している。日本製テレビドラマの受容と香港社会の変遷とを関連づけるところが非常に興味深い。しかし、本土の放送文化に与えた具体的な影響についてはそれほど深く触れていない。

②大場吾郎『テレビ番組海外展開60年史—文化交流とコンテンツビジネスの狭間で—』特に第2章「停滞期—1970年代 アジア市場進出の本格化」（2017年）

著者はコンテンツビジネスの観点をを用い、香港を日本製テレビドラマのアジア進出の代表的な地域として、日本製テレビドラマが輸入された契機とルートを分析した。なお、ドラマだけでなく、「紅白歌合戦」などの日本番組を生中継した際の状況が描かれている。そして、日系企業の香港支社の関係者に取材し、貴重な一次資料を用いている。ただし、この章節は全体像の描画にとどまり、作品に関する具体的な分析はほぼ見当たらない。引用されている資料もその大半が日本の新聞紙と資料で、現地の具体的な状況についてはあまり言及されていない。

一方、香港における先行研究は以下の通り。

①Wong, Chi-hang[王志恒]From “V is the sign” to “Love generation”: how the production, circulation, and consumption of Japanese TV dramas have changed in postwar Hong Kong (2010年)

第二次世界大戦以降、日本製テレビドラマがどのように香港に輸入され、流通し、受容されたのかについて述べている。この論文は五つの部分に分けられる。第一部分では香港テレビ局の歴史と香港社会との関係を紹介する。第二部分では日本製テレビドラマのジャンルの変化について整理し、第三部分では主流メディアの変化が日本製テレビドラマの流通に与えた影響について語っている。第四部分では新たな視聴者層の成立と技術革新との繋がりについて論じている。最後の部分は six-facet model<sup>[7]</sup> 理論を用いて60年代—90年代の香港に輸入されたキャラクターの変化を説明している。しかし、設定した考察対象の時代の幅が広すぎ、また考察の重点は香港の文化産業の流通に与えた影響を主とし、テレビドラマ自体には置かれていない。

②呉偉明『日本流行文化與香港』特に第2章「香港的日本電視劇：歷史與影響」

(2005年)

「哈日」<sup>[8]</sup>という文化現象から出発し、日本製テレビドラマが香港でブームになった理由とその背後にある文化的意義を論じ、三つの結論を出している。一つ目はグローバリゼーションの環境の下で、各地の文化が互いに影響し合うことがよく見られるということ。二つ目は日本製テレビドラマが香港で流行しているのは、日本政府の文化政策の産物ではなくて、むしろ香港側のテレビ局の積極的な輸入によるということ。三つ目は香港側が日本製テレビドラマを輸入する際、できる限り香港現地の状況に合うものを選択しているということ。特に、呉氏は香港ドラマの剽窃の疑いについて、「日本製テレビドラマの要素は外面な装飾にすぎない。内面はやはり正真正銘の香港式ドラマだ」<sup>[9]</sup>と語っている。しかし、単に香港ドラマが日本製テレビドラマから影響を受けたという事実を述べているだけで、それ以外、例えば社会面からの考察はなされていない。

#### ③葉嘉欣「探討日本電視劇在香港的研究理論與方法」（2010年）

これまでの日本製テレビドラマの香港における受容状況についての研究成果をまとめている。論文によれば、多くの研究者は岩淵功一によって提出された三つの観点「日本中心、共時性、現代性」で日本製テレビドラマの海外受容を分析している。さらに、彼らはなぜ香港人が日本製テレビドラマに対し親近感を持つのか、といった疑問を解釈する際に、「文化の接近性」という考え方をよく用いている。しかしながら、葉氏は以上の考え方にそれぞれ問題と不足があると指摘した。たとえばこれまでの研究はテキスト分析法と視聴者分析法の二つの研究方法を採用しているが、これによって得られた結果には客観性が足りない。論文の結論において、葉はこれからの研究方法について「現在の主流としてのテキスト分析方と視聴者分析方を乗り越えて、人類学の民族誌の方法を用いるべきだ」<sup>[10]</sup>と提言している。

#### ④高橋李玉香「日劇在香港的發展及其文化意義」（2002年）

まず日本製テレビドラマの香港輸入時期を「70年代—日劇の出現と影響」、「80年代—日劇ブームの発展期と浸透期」、「90年代初期—日劇がもたらした文化衝撃の前奏」および「90年代後期—日劇の商品化」の四つの段階に分ける。日本製テレビドラマが香港の若者に与えた影響を調査するために、インタビューの方法を用いた。一方、日本製テレビドラマが香港で人気だという事実のみにとどまらず、「日本文化」と「日本的な要素」が香港社会に染み込む原因だと背後の文化意義について論じた。また、90年代に入ると、日本文化はすでに異国的なものから香港の大衆文化の一つになったと指摘した。

### 小結

これらの先行研究は、様々な研究成果をもたらしたが、問題点も存在している。その共通点はまず当時の視聴者の反響を具体的に分析していないことである。また、輸入された日本製テレビドラマがどのようにローカライズされたのかについて言及していない。最後は、当時の日本商品及び企業の香港への進出とドラマの輸入とを関連づける研究も少ない。したがって、本論文は前述した問題点の解明を目指す。

## 第2章 香港テレビ放送発展略史

### 2.1 ラジオ放送史

テレビが普及するまでは、情報の通達や大衆の娯楽や民衆の教化などの面において、ラジオは重要な役割を果たした。それだけでなく、ラジオ放送はテレビ放送の発展と緊密に繋がっている。それゆえ、テレビ放送史を紹介する前に、香港のラジオ事業に関して整理しておきたい。

70年代の香港では、ラジオ事業は公営の「香港電台」と民放の「商業電台」、「麗的呼声」の三社によって行われていた。1928年6月30日に、香港最初のラジオチャンネル「GOW」の放送が始まった。これは「香港電台」の前身であり、開局当初は英語のみで放送した。1929年に、英語チャンネルの名前を「ZBW」に変え、1934年に、中国語チャンネル「ZEK」を増設した。1941年に太平洋戦争が勃発し、1941年12月26日に日本軍によってこの放送局は占領され、放送が一旦停止した。1942年2月に放送を再開したが、局名は「香島放送局」に変えられ、戦時のプロパガンダ放送を行った。以後、香港のラジオ事業は三年間の低迷期に陥った。占領期の放送状況およびその内容については、小林英夫・柴田善雅『日本軍政下の香港』に、以下のようにまとめられている<sup>[11]</sup>。

中波による二本の放送が行われ、第一放送は日本人向けで、東京発東亜放送の中継を行い、日本からの情報の提供を行うほか、随時香港編成の番組を挿入して、軍政の宣伝に努めていた。報道のみならず、教養、娯楽の番組も提供していた。……第二放送は日本人以外に向けた放送で、「総督政治の徹底周知、米英思想の払拭、大東亜戦争の完遂への協力に向かつて民衆を指導することを方針」としていた。

終戦から3年後の1948年に、「ZBW」と「ZEK」のチャンネル名は廃止され、「香港電台（RHK）」という公式的な名前が定められた。

また、香港のテレビ放送と緊密に繋がっているラジオ局「麗的呼声」は特筆すべきだ。1949年に、麗的呼声（香港）有限公司（Rediffusion）<sup>[12]</sup>は「麗的呼声」という名のラジオ局を開設した。しかし、視聴するには多くの費用が必要だった。工事費は25香港ドル、そして月々の視聴料は10香港ドルだった。50年代前半、「麗的呼声」は中国語チャンネルの「銀色中文台」と英語チャンネルの「藍色英文台」の二つのチャンネルを持っていた。1956年に、二つ目の中国語チャンネル「金色中文台」の放送を開始した。そして、民間放送局だったため、収益も考えなくてはならなかった。聴取率を高めるために、様々な対策を実施した。その中で、最も役に立ったのがラジオドラマと「天空小説」<sup>[13]</sup>だ。これらのラジオ番組によって、一般市民の間で人気を呼び、「麗的呼声」の加入者数も次第に増加した。『一起廣播的日子——香港電台八十年』では、当時の人気ぶりを以下のように紹介している。「市内の多くの家庭はラジオ受信機を購入した。……4人に1人は『麗的呼声』を聞いている。聴取料を払えない人は街頭の喫茶店に行くので、『麗的呼声』を流し



ている店はいつも満席となる」<sup>[14]</sup>。しかしながら、70年代に入ると、麗的広播公司是経営の中心をテレビ事業に移したので、1973年に「麗的呼声」は終焉を迎えた。

一方、「商業電台」は民放無線ラジオとして、1959年に成立して以降、市民のラジオ番組に対する選択肢を増やした。当初は中国語チャンネルと英語チャンネルに分け、朝の7時から夜の12時まで放送していた。ほかのラジオ局に比べ、「商業電台」の最大の特徴は商業広告の放送だと思われる。番組の間に、大量の広告を挟んで、その量は約放送時間の半分を占めていた<sup>[15]</sup>。広告の収益を増やすために、番組制作でも工夫をした。たとえば、「商業電台」の三つのチャンネルが目指した聴衆者層は明確で、以下の表の通りである。

チャンネル	言語	内容	対象
商業一台	中国語、広東語	ニュース、時事	25歳以上の市民
商業二台	中国語、広東語	現地のポップミュージック	青少年
英文台	英語	外国のポップミュージック	ホワイトカラー

【表1:「商業電台」各チャンネル概況】<sup>[16]</sup>

このように、「商業電台」は多様な経営戦略で、香港市民に好かれ、現在でも、人気を持っている。

以上述べたように、この三つのラジオ局は香港のラジオ事業に多大な貢献をした。テレビ時代の到来を控え、数多くの人材の育成事業を行ったと評価できよう。しかし、経済の高速な発展に伴い、ラジオだけではすでに香港市民の精神要求に応えられなくなっていた。以下、香港のテレビ放送事業について述べたい。

## 2.2 麗的電視

1957年5月29日に、麗的呼声（香港）有限公司は有線テレビ局「麗的映声」を開局した。これを起点として、香港テレビ放送事業が始まった。「麗的映声」の開局当初は、イギリス資本であったため、植民地的色彩が濃かった。白黒で英語の番組だけを放送し、中国語番組は極めて少なかった。さらに、番組の内容もつまらなく、その多くはイギリスから輸入されたドキュメンタリーなどで、英語をそのまま使い、吹き替えも字幕は付いてなかった。それだけでなく、放送料金も高く「一世帯に25香港ドルの設置料が必要で、受信機のレンタル代が月45香港ドル、受信料が月25香港ドルで、政府に納める費用が年36香港ドルだった。また、テレビの値段が300から500香港ドルだった。これは当時、月収が150から200香港ドルの香港家庭にとって、かなり負担だった」<sup>[17]</sup>。そのため、当時の視聴者は外国人と富裕層に止まっていた。1963年9月に、「麗的映声」は「中文台」を増設したが、これまでと同様に輸入された番組の放送を中心としていたが、広東語

の吹き替えをつけたため、視聴数は次第に増加した。但し、高額の設定工事費と視聴料という二つの制約により、増加の速度は緩かった。

1973 年、ラジオ「麗的呼声」とともに、「麗的映声」は放送を止めた。同年、麗的電視廣播有限公司が香港で成立し、「麗的電視」(Rediffusion Television Limited, 以下「麗的」と略)が放送を開始した。放送方式も有線から無線に替え、カラー放送も始まった。当時「麗的」中文台が放送した番組はおよそ以下の五種類に分けられる<sup>[18]</sup>。

- ①ニュースと天気予報。
- ②自己製作番組、例えば舞台劇やクイズ番組など。
- ③香港映画。
- ④広東語で吹き替えるあるいは中国語の字幕が付く外国ドラマと映画。
- ⑤政府から要求され制作した番組。

番組の種類からわかるように、外国の番組を見ることはすでに新鮮なことではなくなっていた。

一方で、「麗的」は「無線電視」との長年の競争において初めから不利な立場に立っていた。経営の方針を革新しつつ、様々な手段を試したが、不振の局面を転換できなかった。そのため、1981 年、イギリスの親会社が「麗的」から資本を全面的に撤収した。翌 1982 年に、「麗的」の局名も「亜洲電視」(Asia Television Limited)に変わった。

## 2.3 無線電視

1967 年、「麗的」のライバルとなる香港電視廣播有限公司 (Television Broadcasts Limited、通称無線 TVB、以下「無線」と略)が開局した。その名が示す通り、このテレビ局は「麗的」の有線の放送方式と異なり、無線放送を行った。しかも、香港初の無料チャンネルで、これは香港テレビ放送史における壮挙だった。『香港電視』の創刊号の記事が盛大な状況を以下のように詳細に紹介している。1967 年 11 月 19 日の開局の日に、当時の香港総督までもが開幕儀式に出席した。関係者が多様な番組を宣伝しつつ、廉価なテレビも間もなく発売されるだろうと語っている<sup>[19]</sup>。かくて、「無線」の誕生は 60 年代の有線有料のテレビ時代を終わらせた。ところで、前述したように、テレビ本体と視聴費用が高いので、テレビの所有率は低い水準に止まっていたが、「無線」はこの局面も打開した。

年度	テレビ所有率 (世帯)	視聴者数 (百万人)	毎日平均放送時間数
1957	3%	0.06	4
1967	12.3%	0.3	22
1968	27.0%	0.7	30
1969	41.2%	1.3	42
1970	60.0%	1.9	44
1971	72.0%	2.1	52
1972	77.8%	2.2	52

1973	84.7%	2.4	52
1974	86.2%	2.6	50
1975	89.0%	2.9	59
1976	90.0%	3.0	60
1977	90.0%	3.2	65

【表 2: 1957 年—1977 年香港におけるテレビ所有率】<sup>[20]</sup>

上の表の通り、1957 年のテレビ所有率はまだ 3% で、視聴者数は 6 万人であった。「無線」開局の 1967 年になると、テレビ所有率は一気に 12.3% に上り、視聴者数は 30 万人に飛躍的に増加した。10 年後の 1977 年には、テレビ所有率は 90% を達成し、視聴者数は 320 万人に達した。テレビ所有率と視聴者率はともに相当上がった。この表は当時の大衆はテレビを視聴する習慣の定着をも反映していると思われる。

「無線」は、広東語で放送する翡翠台と英語で放送する明珠台の二つのチャンネルを持っていた。開局したばかりの 70 年代初期は、「麗的」と同じく、技術面と資源面ともにまだ未成熟だったため、自力で作った番組は少なく、放送された番組は大半が輸入された海外の作品であった。その中で、日本製テレビドラマは安かったのも、大きな比重を占めた。ほぼ毎日 2、3 本の日本製テレビドラマが放送された。1971 年に、「無線」はカラー放送を開始した。このカラー放送も香港で初めての試みであった。つまり、どちらの試行でも、「麗的」より、「無線」はずっと先であった。それゆえ、「麗的」は早く開局したが、視聴者数であれ収益であれ、「無線」のほうが上位だった。この点は香港電視諮詢委員会によって作られた『香港電視進展報告書』で明らかにされている。毎日「無線」が放送した広告の時間数が「麗的」より断然的に多い。視聴率も恐らく無線の方が高かったと推測できる。そのため、各会社が「無線」に多くの資源を投入するという考えであろう。また、「無線」の経営は広告収入から支持されている。70 年代の「無線」のテレビ広告の費用は 30 秒ごとに約 300 香港ドルである。1975 年の統計によると、前年の広告費は約 6,000 万香港ドルで、うち収益が約 1,000 万香港ドル以上である。しかも、放送された広告は、日本商品のものが最も多い<sup>[21]</sup>。

## 2.4 その他

「麗的」と「無線」以外に、70 年代にはほかのテレビ局も開局した。たとえば、香港佳芸電視有限公司（Commercial Television、略称「佳視」）は 1975 年 9 月に開局した。

「佳視」は当時香港唯一の中国語のみのテレビ局で、放送権交付の条件に従って、開局当初は全 6 時間の放送時間のうち 2 時間は必ず教育番組を放送しなければならなかった。のちに放送時間は 1 日 10 時間に伸びた。そのうち教育番組が占める割合は 60% である<sup>[22]</sup>。一見すると、「佳視」は教育専用のテレビ局のイメージが強いが、実際には「佳視」は初期に台湾のテレビドラマをも大量に輸入した。中後期には自局製作の「武侠劇」が数多く視聴者を引きつけた<sup>[23]</sup>。また、深夜の時間帯にも成人番組を放送し、香港の成人番組の先駆けとなった<sup>[24]</sup>。

「佳視」は「廣播道」(Broadcast Drive)という通りに位置する。このたった1kmほどの道に、「無線」、「麗的」、「佳視」、「商業電台」、「香港電台」の五つのテレビ局とラジオ局があった。このため、五つのテレビ局が繰り広げた競争は「五台山之争」と呼ばれていた。しかし、視聴率の低迷と広告収入の激減により、1978年10月19日に、「佳視」は破産した。その後、「麗的」と「無線」は香港の代表的なテレビ局となった。

### 第3章 輸入された日本製テレビドラマ

香港はイギリスの影響が社会に浸透している。前述の通り、テレビ放送が始まった当初の影響力は当時の外国人と富裕層に止まっており、テレビは高級品としてごく少数の人しか所有していなかった。放送された番組はおおよそ欧米製のテレビドラマやドキュメンタリーで、たまに放送された欧米製以外の番組も英語で吹き替え放送をしていた。当時の大衆は最初新鮮味を感じたが、内容は日常生活と非常に離れているので、長時間の興味を持つことができなかった。それに対し、日本製テレビドラマは他国の生活を紹介しつつ、中に含まれる精神力が当時の高度経済成長期の心にマッチしていた。それゆえ、大衆に親しまれ、大歓迎された。本論では、1970年—1978年分の『明報』の「毎週電視」（日曜版第9面掲載）に基づいて、放送していた日本製テレビドラマをまとめた。ただし、取り上げたのはすべての日本製テレビドラマではなく、代表的な作品に絞った。

#### 3.1 スポ根ドラマ

香港題名	原題	主な出演者	香港放送局、期間	日本放送局、期間
青春火花	サインはV	岡田可愛、中山麻理、范文雀	無線, 1970年—1971年（午後8時—8時30分）	TBS, 1969年10月5日—1970年8月16日
柔道小金剛	柔道一直線	桜木健一、高松英郎、吉沢京子	麗的, 1970年（午後7時30分—8時）	TBS, 1969年6月22日—1971年4月4日
紅粉健兒	美しきチャレンジャー	新藤恵美、森次浩司、進千賀子	無線, 1971年（午後8時—8時30分）	TBS, 1971年4月4日—10月17日
緑水英雌	金メダルへのターン！	梅田智子、青木英美、小泉博	無線, 1972年（午後8時50—9時20分）	フジテレビ, 1970年7月6日—1971年9月27日
柔道龍虎榜	姿三四郎	竹脇無我、菅原謙次、鮎川いずみ	無線, 1972年—1973年（午後8時30分—9時）	日本テレビ, 1970年1月18日—1970年9月20日
柔道龍虎門	闘魂	あおい輝彦、新藤恵美、菅原謙次	無線, 1973年（午後8時30分—9時）	日本テレビ, 1970年10月4日—1971年2月14日
剣道羣英	打ちこめ！青春	中山仁、石橋正次、范文雀	麗的, 1973年（午後7時30分—8時）	NETテレビ（テレビ朝日）, 1971年1月7日—4月1日
柔道女金剛	女三四郎	江波杏子、高城丈二、成田三樹夫	無線, 1974年（午後0時45分—1時45分）	東京12チャンネル（現・テレビ東京）, 1970年10月

				3 日—1970 年 12 月 26 日
棒球怪傑	ガッツジュン	藤間文彦、丘みつ子、桜井マリ	無線, 1974 年 (午後 0 時 15 分—0 時 45 分)	TBS, 1971 年 4 月 11 日—11 月 21 日
網球雙鳳	コートにかける青春	紀比呂子、森川千重子、大田黒久美	無線, 1974 年 (午後 8 時—8 時 30 分)	フジテレビ, 1971 年 9 月 3 日—1972 年 8 月 25 日

【表 3: 輸入された日本製スポ根ドラマ (一部)】

表の通り、10 作のうち、「無線」は 8 作で、「麗的」は 2 作であった。「麗的」と比べて、「無線」の方がより数多くのスポ根ドラマを輸入している。

さて、スポ根ドラマは一体どんなドラマだろうか。この問題を説明するためには、まず「スポ根」を解釈しなければならない。「スポ根」という言葉は、簡単に言えば、「スポーツ」と「根性」の二つの言葉を組み合わせた。「スポーツ根性もの」の略称である。1964 年東京オリンピックの開催による「オリンピック景気」を下敷きにして、当時の日本の大衆の間には「厳しい状況に置かれても、根性を持ち、困難を乗り越えよう」という風潮が存在した。一般のスポーツドラマと異なり、スポ根ドラマは以下の特徴を持っている。

- ①主人公が非常に努力すること。
- ②主人公のそばに厳しいコーチがいること。
- ③主人公の必殺技がおよそ現実世界では実現できないこと。
- ④主人公が必ず最後の勝利を得ること。
- ⑤漫画の原作を持つものが多いこと。

また、香港に輸入されたスポ根ドラマ自体の題材も多様で、日本の伝統競技項目としての柔道、剣道のみならず、テニス、バレーボール、水泳などにも及んでいる。

以前の香港の学者の研究では、日本製スポ根ドラマは常に「体育劇、スポーツをテーマにしたドラマ、TV sports drama」というように簡単に定義され、多くが「根性」の要素を見逃していた。本論文で、筆者はこのスポーツ類のドラマが「スポ根ドラマ」とであると明示したい。

ところで、Lee, J (2009) は、70 年代の香港経済が高速な発展をし、当時の若者は彼らの両親と異なり、自分の努力によって、自分と家庭の生活レベルも上げられると信じており、この精神状態が広東語方言で言えば「搏 (pok)」だと指摘した。また、Lee によると、「搏」は「積極 (pro-activity)、激しい競争 (fierce competition)、リスクの引受 (risk-taking)」の意味を持っている<sup>[25]</sup>。Wong, Chi-hang [王志恒] (2010) は「搏」の説を肯定的に引用し、さらにスポ根ドラマと関連付け、70 年代の香港でスポ根ドラマが人気を博した理由について論じている。王氏は 70 年代香港に輸入されたスポ根ドラマと青春ドラマに反映している「頑張る精神 (Ganbaru spirit)」は「搏」に通じると指摘している<sup>[26]</sup>。両方とも人間の努力を強調している。私はこの意見に同意する。さらに、王氏はスポ根ドラマの 3 番目の特徴、すなわち「主人公の必殺技がおよそ現実世界では実

現できないこと」にも言及している。スポ根ドラマにおける「頑張る精神」の表現方法は、実世界において人間が努力する姿を描くばかりでなく、実世界においてはありえない魔術的な必殺技も描写している。それゆえ、スポ根ドラマは香港において絶大な人気を博す一方で、この魔術的な必殺技に対する視聴者のマイナス評価も存在していた。この点について 4.2.2「視聴者からの投書」において詳細に分析したい。

香港の社会学者呂大樂によれば、香港人は生まれた年代によって四つの世代に分けられる。1920、30 年代に生まれた世代、1946 年から 65 年に生まれ成長した世代、1966 年から 1975 年に生まれた世代、1976 年から 1990 年までの世代である。このうち、第二世代（1946—1965 生まれ）の香港人はちょうど「戦後ベビーブーマー」として、そして香港の工業社会に転換する時期において、彼らは「刻苦奮闘、不撓不屈、相互幫助」というアイデンティティを持っている<sup>[27]</sup>。これは、70 年代以降香港社会で自らのアイデンティティとして認められた「獅子山精神（香港精神）」<sup>[28]</sup>とある程度共通しているだろう。日本製テレビドラマが大量輸入された 70 年代はちょうど第二世代の香港人の青少年期と重なり、おそらく「スポ根ドラマ」を見ている際に、共感を感じたかもしれない。

また、これらのスポ根ドラマのうち、『サインは V』が最も代表的な作品である。なぜこのドラマは香港の視聴者を惹きつけたのだろうか。当時、香港から日本へ第二、第三の『サインは V』を求めてテレビ番組を買い付けに訪ねていた花王有限公司代表の黄天佑は「（スポーツ根性モノの）目新しさと、次には若いタレント集団の弾むような躍動ぶり。第三にはタレントたちのモダンなルック。ドラマの内容が堅実だし、音楽もいいですね」と語っている<sup>[29]</sup>。

以上にまとめたように、「スポ根」と「搏」の間に以上のいくつかの共通点と相違点が存在するが、70 年代の香港市民は日本製のスポ根ドラマを視聴しながら、中に反映された精神力が当時香港人のアイデンティティに一致するのを感じた。それゆえ、当時「スポ根ドラマブーム」が引き起こされたのである。

### 3.2 特撮ドラマ

香港題名	原題	主な出演者	香港放送局、期間	日本放送局、期間
超人歴險記	帰ってきた ウルトラマン	団次郎、塚本信夫、根上淳	無線, 1973—1974 年（火曜午後 5 時—5 時 30 分）	TBS, 1971 年 4 月 2 日—1972 年 3 月 31 日
【備考】60 年代末に放送が始まった『超人』（『ウルトラマン』, TBS, 1966 年 7 月 10 日-1967 年 4 月 9 日）が最初に輸入された『ウルトラマン』シリーズ				
幟面超人	仮面ライダー	藤岡弘、佐々木剛、小林昭二	麗的, 1974 年（月曜午後 6 時 55 分—7 時 20 分）	NET テレビ（テレビ朝日）, 1971 年 4 月 3 日—1973 年 2 月 10 日
電光科學人	ミラーマン	石田信之、宇佐美淳也、和崎俊哉	無線, 1974 年（木曜午後 4 時 35 分—5 時）	フジテレビ, 1971 年 12 月 5 日-1973 年 11 月 26 日

太空小英傑	光速エスパー	三ツ木清隆、細川俊夫、月丘千秋	無線, 1974 年 (土曜午後 1 時 35 分—2 時)	日本テレビ, 1967 年 8 月 1 日—1968 年 1 月 23 日
彩虹化身俠	レインボーマン	水谷邦久、井上昭文、本山可久子	無線, 1975 年 (日曜午前 11 時 15 分—11 時 45 分)	NET 系列 (テレビ朝日), 1972 年 10 月 6 日—1973 年 9 月 28 日
少傑三雄	怪傑ライオン丸	潮哲也、九条亜希子、梅地徳彦	無線, 1975 年 (水曜午後 2 時—2 時 25 分)	フジテレビ, 1972 年 4 月 1 日—1973 年 4 月 7 日
閃電超人	イナズマン	伴直弥 (伴大介)、北村晃一、桜井マリ	麗的, 1975 年 (木曜午後 7 時 25 分—7 時 55 分)	NET 系列 (現テレビ朝日), 1973 年 10 月 2 日—1974 年 3 月 26 日
銀面飛俠	シルバー仮面 (シルバー仮面ジャイアント)	柴俊夫、亀石征一郎、夏純子	無線, 1976 年 (日曜午後 5 時 30 分—5 時 45 分)	TBS, 1971 年 11 月 28 日—1972 年 5 月 21 日
小露寶	がんばれ!! ロボコン	山本圭 (声)、大野しげひさ、加藤みどり	麗的, 1976 年—1977 年 (月曜午後 6 時 5 分—6 時 35 分)	NET 系列 (現テレビ朝日), 1974 年 10 月 4 日—1977 年 3 月 25 日
電腦奇俠	人造人間キカイダー	伴大介 (伴直弥)、水の江じゅん、神谷政浩	麗的, 1976 年 (水曜午後 6 時 5 分—6 時 30 分)	NET 系列 (現テレビ朝日), 1972 年 7 月 8 日—1973 年 5 月 5 日
雷電俠 (電光俠)	サンダーマスク	菅原一高、井野口一美、黒田英彦	無線, 1977 年 (土曜午前 11 時—11 時 30 分)	日本テレビ, 1972 年 10 月 3 日—1973 年 3 月 27 日

【表 4: 輸入された日本製特撮ドラマ (一部)】

数多くの輸入された日本製テレビドラマのうち、特撮ドラマは間違いなく最も特殊な一種類だと思われる。日本と同様、特撮ドラマは香港において子供に向け番組として位置付けられていたようである。放送時間から見れば、特撮ドラマは午後 5 時、6 時前後の子供の通常の下校の時間帯に放送されていた場合が多いと分かる。しかし、午前中または午後 1 時、2 時前後の時間帯に置かれている場合も存在する。この点はおそらく香港の小学校の授業時間の設定と関係がある。1993 年から香港の教育署が徐々に小学校の全日制を普及させたが、それ以前、香港の小学校はほとんど半日制で、午後 1 時、2 時はちょうど午前班の学生の下校時間であった。特撮ドラマをこの時間帯に放送するのは、午前班の子供の要求に応えたのだろう。その他、学校が休みになる土日の昼の時間帯も特撮ドラマは放送されていた。



また、特撮ドラマの代表的な作品『ウルトラマン』の製作会社円谷プロダクションの初代社長円谷英二は、「日本特撮映画の父」として、香港の特撮映画にも多大な貢献をした。彼が特技監督をつとめた『白蛇伝』（邦題：『白夫人の妖恋』、邵氏父子有限公司 / 東宝株式会社、1957 年 3 月）が香港で人気を博した。

一方、『ウルトラマン』は数多くの視聴者の注目をひきつけた。そして、各テレビ局によるその他の特撮ドラマの輸入を促進した。そのうち、『がんばれ！！ロボコン』によって引き起こされた「小露寶」ブームは見逃せない。この特撮ドラマのテーマ曲は広東語でカバーされ、今でも子供に好かれている。2014 年に、ロボコン生誕 40 周年を記念するために、香港のコーンヒル・プラザ（康怡廣場）で盛大なイベントが行われた。大勢の親は子供を連れて、ロボコンの模型などを見るために足を運んだ<sup>[30]</sup>。

さて、輸入された日本製特撮ドラマはおおよそ二種類に分けられる。一つは視聴者層が相対的に広い『ウルトラマン』を代表とするものである。もう一つは『がんばれ！！ロボコン』のような、視聴者層がほぼ子供に限られているものである。内容からみれば、『ウルトラマン』のような日本製特撮ドラマには児童に適していない部分がある程度存在する。たとえば、ウルトラマンたちは怪獣と戦う際に暴力的なシーンも含まれているので、子供に悪い影響を与える恐れがある。『ウルトラマン』に対して、『がんばれ！！ロボコン』は物語が簡単で、子供にとってわかりやすいであろう。

### 3.3 時代劇

香港題名	原題	主な出演者	香港放送局、期間	日本放送局、期間
隠密剣士	隠密剣士	大瀬康一、牧冬吉、大森俊介	無線, 1967 年 (70 年代再放送) (午前 11 時 45 分—午後 0 時 15 分)	TBS, 1962 年 10 月 7 日—1965 年 3 月 28 日
一剣走天涯	無用ノ介	高橋英樹、梶芽衣子、大西結花	無線, 1970 年 (午後 11 時 25 分—12 時 25 分)	日本テレビ, 1969 年 3 月 1 日—1969 年 9 月 20 日
雌雄殺手	女殺し屋花笠お竜	久保菜穂子、カルーセル麻紀、長門勇	無線, 1971 年 (午後 5 時 25 分—6 時 15 分)	東京 12 チャンネル (現・テレビ東京), 1969 年 10 月 4 日—1970 年 3 月 28 日
大内煞星 (江戸煞星)	大江戸捜査網	杉良太郎、瑳川哲朗、岡田可愛、梶芽衣子	無線, 1971 年 (午後 2 時 30 分—3 時 30 分)	東京 12 チャンネル (現・テレビ東京), 1970 年 10 月 3 日—1984 年 3 月 31 日

盲俠走天涯	座頭市物語	勝新太郎	麗的, 1975 年 (午後 10 時 35 分—11 時 30 分)	フジテレビ, 1974 年 10 月 3 日—1975 年 4 月 17 日
斬虎屠龍劍	子連れ狼	萬屋錦之助、西川和孝、高橋幸治	麗的, 1975 年 (午後 8 時 30 分—9 時 30 分)	日本テレビ, 1973 年 4 月 1 日—1976 年 9 月 26 日
小旋風紋次郎	木枯し紋次郎	中村敦夫	無線, 1978 年—1979 年 (午後 10 時 35 分—11 時 35 分)	東京 12 チャンネル (現・テレビ東京), 1977 年 10 月 5 日—1978 年 3 月 29 日

【表 5: 輸入された日本製時代劇（一部）】

時代劇は日本製テレビドラマの代表的なジャンルとして、長時期にわたり日本人に愛されている。70 年代に香港に輸入されて以降、特に『座頭市』シリーズ<sup>[31]</sup>が一世を風靡した。ただし、明らかに物語の背景や衣装など、すべて完全な日本式で、普通に考えれば、全く異なる文化と歴史環境の下で成長した香港人が、共感するわけがない。では、時代劇が香港で人気がある理由はなんだろう。おそらく、これは香港の武侠映画と関係している。

武侠映画とは、おおまかに言えば文字通り「武」と「俠」を描く映画である。主な登場人物は、武術にすぐれ、任侠を重んじるものたちだ<sup>[32]</sup>。中国の武侠映画の誕生は大体 1920 年代に遡れる<sup>[33]</sup>。1928 年に『江湖奇俠伝』を取材にした『火焼紅蓮寺』はすでに相対的に成熟した武侠映画とされている<sup>[34]</sup>。

歴史の変遷につれて、武侠映画も次第に発展し、変容していく。視点を香港に移せば、香港の武侠映画は二人の小説家と密接な関係があるように思われる。一人は前に言及した金庸で、もう一人は同じ年に生まれた梁羽生である。また、梁羽生もしばしば「新派武侠小説の開祖」と呼ばれている。彼らの武侠小説を原作にして実写化された映画が数多く存在している。例を挙げると、金庸の『書剣恩仇録』、『笑傲江湖』、『神鵬俠侶』などの名作の映画版が、たとえば『清朝皇帝 第 1 部 紅花党の反乱／第 2 部 シルクロードの王女・香妃』<sup>[35]</sup>、『スウォーズマン 剣士列伝』<sup>[36]</sup>、『レスリー・チャンの神鳥英雄伝』<sup>[37]</sup>続出していた。また、梁羽生の方は、『七剣下天山』、『白髪魔女伝』なども、『セブンソード』<sup>[38]</sup>、『キラーウルフ/白髪魔女伝』<sup>[39]</sup>に映画化された。これらの映画作品は自身の優れたストーリー性によって観客を魅せる。それと同時に、映画製作の会社側もこれらの武侠小説に潜んだビジネスチャンスに気づき、現在までもリメイクが行われている。

さらに、香港武侠映画といえば、ショウ・ブラザース（邵氏兄弟(香港)有限公司）がもう一つのキーワードであろう。香港が「東洋のハリウッド」として名を馳せるにいたるには、ショウ・ブラザースが多大な貢献をした。1958 年、「無線」創始者の一人の邵逸夫によってショウ・ブラザースが成立された。1965 年、邵氏は「彩色武侠（新）世紀」のローガンを提唱し、武侠映画の業界に新たな可能性を取り入れ、革命を巻き起こした。こうしてたくさんの傑作が生み出された。そのうち、『片腕必殺剣』<sup>[40]</sup>が特別に語られるべ

きであろう。この映画の監督張徹はもう一人の監督胡金銓とともに、ショウ・ブラザーズの武侠映画の看板監督である。張の映画はよく男性の勇ましさを賛美し、主人公の義侠心を強調する。『片腕必殺剣』は香港映画で初めての興収成績が100万香港ドルを超える映画で、張徹もこれによって「百万監督」との高名を得た。現在の興行収入と比べるならば、確かに100万ぐらいは大した数字ではない。だが、当時の国産映画のチケット代はおおよそC席が1.5香港ドルで、B席が2香港ドル、A席が2.4香港ドル、S席が3.5香港ドルであった<sup>[41]</sup>。普通の国産映画の興行収入は大体50—60万香港ドルなので、こう考えれば、100万は極めていい成績だと言える。しかも、『片腕必殺剣』の大ヒットで、数多くの続作たとえば、『独臂刀王』<sup>[42]</sup>、『新独臂刀』<sup>[43]</sup>、『女独臂刀』<sup>[44]</sup>などが次々と作られた。

### 3.4 その他

本節では、内容に基づいて日本製テレビドラマをホームドラマ、青春ドラマ及び探偵・刑事ドラマという三つのジャンルに分類する。そして、これらのドラマがどのように香港の視聴者の審美趣向に影響したかという問題を明らかにしたい。まずは、ホームドラマについて説明しておきたい。

#### 3.4.1 ホームドラマ

香港題名	原題	主な出演者	香港放送局、期間	日本放送局、期間
彗星女郎	コメットさん	九重佑三子	無線, 1970年(午後5時—5時30分)	TBS, 1967年7月3日—1968年12月30日
佳偶天成	3人家族	竹脇無我、栗原小巻	無線, 1971年(午後8時—8時30分)	TBS, 1968年10月15日—1969年4月15日
二人世界	二人の世界	竹脇無我、栗原小巻	無線, 1972年(午後8時—8時30分)	TBS, 1970年12月1日—1971年5月25日
望子成龍	たんとんとん	森田健作	無線, 1974年(午後5時10分—5時35分)	TBS, 1971年6月1日—1971年11月30日、
鸞鳳和鳴	お嫁さん (第7シリーズ) <sup>[45]</sup>	岡崎由紀	無線, 1974年(午後5時25分—5時55分)	フジテレビ, 1969年10月1日—1970年3月25日

外甥多似舅	パパと呼ばないで	石立鉄男、杉田かおる	麗的, 1976 年 (午後 5 時 30—6 時 20 分)	日本テレビ, 1972 年 10 月 4 日—1973 年 9 月 19 日
俏姪女	ぼくは叔父さん	郷ひろみ、フォーリーブス	無線, 1978 年 (午前 11 時 15 分—11 時 45 分)	日本テレビ, 1973 年 10 月 1 日—1974 年 3 月 25 日
吾妻十八歳	おくさまは 18 歳	岡崎友紀、石立鉄男	無線, 1978 年 (午後 6 時—6 時 30 分)	TBS, 1970 年 9 月 29 日—1971 年 9 月 28 日

【表 6: 輸入された日本製ホームドラマ (一部)】

日本のホームドラマの全盛期は 1970 年代の前半である<sup>[46]</sup>。この時期に向田邦子、佐々木守、木下恵介などのような優秀な脚本家と監督が活躍していた。彼らは視聴者のために、『二人の世界』、『3 人家族』、『コメットさん』、『寺内貫太郎一家』などのような暖かく絶賛されたホームドラマを製作した。テーマも「一家団欒」という理想的な家庭像を描写するものが主であった。そして、当時香港のテレビ局も数多くのホームドラマを買い入れた。

ホームドラマは元から香港ドラマに大きな比重を占める一ジャンルである。中国では「家庭倫理劇」と呼ばれている。家庭を中心にし、写実的な物語を述べるドラマは一般的にそれに分類される。主人公の出身により、一般家庭を舞台にするものと上流階級を舞台にするという二種類に分けられる。前者は庶民が自分の夢と家族のために、いかに奮闘して成功を手にいれるかを描いた物語である。それに対して後者は遺産の相続権をめぐる紛争、家族の間に発生したお互いの暗闘を描写するのがほとんどである<sup>[47]</sup>。なお、この「家庭倫理劇」の視聴者層には女性、特に家庭主婦が多いという特徴がある。

一方、日本の 70 年代のホームドラマは大部分が家族の間の温情と恋人の真摯な感情を描いている。香港の視聴者にとって、価値観の面で欧米より、同じくアジアに位置する日本に親近感が湧くかもしれない。李少南のアメリカ製番組、日本製番組と台湾製番組の香港における受容状況の調査によれば、日本製番組の内容は「反映当地生活文化 (当地の生活と文化を反映する)」の項目でアメリカと台湾のものよりパーセンテージが少し高めである。また、価値観についての調査では、日本製番組は「重視個人理想之追求 (個人の理想を重視する)」「重視家庭生活 (家庭生活を重視する)」という二つの項目での評価が高い<sup>[48]</sup>。なお、「家庭生活を重視する」という点はまさにホームドラマの核心だと思われる。この調査結果から、日本製ホームドラマが香港で受け入れられた理由も理解できよう。

### 3.4.2 青春ドラマ

香港題名	原題	主な出演者	香港放送局、期間	日本放送局、期間
青春兒女	太陽の恋人	櫻木健一、吉沢京子	麗的，1974 年（午前 11 時 30 分—午後 0 時 35 分）	NET 系列（現テレビ朝日），1971 年 7 月 22 日—10 月 14 日
女校男生	おれは男だ！	森田健作、早瀬久美	無線，1975 年（午後 5 時 40 分—6 時 30 分）	日本テレビ，1971 年 2 月 21 日—1972 年 2 月 13 日
校園小金剛	青春をつつ走れ！	森田健作、紀比呂子、郷ひろみ	無線，1976 年（午後 6 時 10 分—7 時）	フジテレビ，1972 年 4 月 3 日—1972 年 7 月 31 日
前程錦繡	俺たちの旅	中村雅俊、田中健、秋野太作、森川正太	無線，1976 年（午後 6 時—6 時 30 分）	日本テレビ，1975 年 10 月 5 日—1976 年 10 月 10 日
青春校園	おこれ！男だ	森田健作、石橋正次、佐藤オリエ	無線，1976 年（午後 6 時 5 分—7 時）	日本テレビ，1973 年 2 月 25 日—1973 年 9 月 30 日
荳蔻年華	小さな恋のものがたり	沖雅也、岡崎友紀	無線，1976 年（午後 5 時—5 時 30 分）	日本テレビ，1972 年 7 月 8 日—9 月 30 日
校園小冤家	ボクは女学生	北公次、木村由貴子、吉田次昭	無線，1977 年（午後 6 時—6 時 30 分）	フジテレビ，1973 年 10 月 5 日—1974 年 3 月 29 日
小淘气	ボクは恋人	北公次、杉田かおる、奈美悦子	無線，1977 年（午後 6 時—6 時 30 分）	フジテレビ，1974 年 4 月 5 日—1974 年 9 月 27 日
青春曲	われら青春！	中村雅俊、島田陽子	無線，1978 年（午後 6 時—6 時 30 分）	日本テレビ，1974 年 4 月 7 日—9 月 29 日

【表 7: 輸入された日本製青春ドラマ（一部）】

青春ドラマの最大の特徴は若手の男優、女優を採用することである。さらに、物語の舞台も学園に設定するものが多い。それで日本製テレビドラマは当時の香港の学生と若者たちに非常に好かれていた。テレビ雑誌と芸能誌の投書欄に掲載された読者からの手紙は、俳優の写真を求めるもの、好きな俳優の作品の再放送を願うものなどが多かった。時

折宣伝で来港する日本人俳優の顔を見るために、空港まで押し寄せるファンも数多くいた。

60年代以降、香港は経済の急成長につれて、義務教育もようやく完備してきて、1978年に、9年制の義務教育がやっと制定された。しかし、高等教育の状況はまだまだ厳しかった。デビッド・グロスマンは「植民地政府が1910年に香港大学（HongKong University）を設立してから1963年までの間、大学といえば香港大学のみであり、それから1988年までの間も、大学はわずか2校しか存在しなかった。」<sup>[49]</sup>と述べている。70年代に香港の大学が2校しかないという状況から見れば、当時高等教育を受ける人数は非常に少なかっただろう。日本の教育状況と比べて、相当な差が存在していた。日本は1947年にすでに義務教育制度を施行していた。高等教育の面では、喜多村和之の『現代大学の変革と政策——歴史的・比較的考察』によれば、「日本の大学・短大の在籍学生数は、1960年の約70万人が1980年には200万人台を超えた」<sup>[50]</sup>。したがって、日本の高校と大学の学園を舞台として作られた青春ドラマの中に描かれた異国の多彩な学園生活によって、当時香港の若者と学生たちは心を惹かれたのであろう。

### 3.4.3 探偵・刑事ドラマ

香港題名	原題	主な出演者	香港放送局、期間	日本放送局、期間
龍虎羣英	キイハンター	丹波哲郎、野際陽子、千葉真一	無線，1973年—1974年（午後9時35分—10時25分）	TBS，1968年4月6日—1972年9月30日
青年幹探	刑事くん	桜木健一	無線，1974年（午後3時15分—3時45分）	TBS，1971年9月6日—1975年11月17日
猛龍特警隊	Gメン'75	丹波哲郎、倉田保昭	無線，1976年（午後9時—10時）	TBS，1975年5月24日—1982年4月3日
青春女探	敬礼！さわやかさん	浅野真弓、宮脇康之、スーザン	無線，1977年（午前11時30分—午後0時）	NET系列（現テレビ朝日），1975年10月6日—1976年3月29日
神鷹七七	アイフル大作戦	丹波哲郎、小川真由美、杉浦直樹、藤木悠	麗的，1977年（午後11時5分—午前0時）	TBS，1973年4月14日—1974年5月4日

神鷹七八	バーディー 大作戦	丹波哲郎、谷隼 人、松岡きっこ	麗的, 1978 年 (午 後 11 時—40 分午 前 0 時 30 分)	TBS, 1974 年 5 月 11 日—1975 年 5 月 17 日
------	--------------	--------------------	--	--

【表 8: 輸入された日本製探偵・刑事ドラマ（一部）】

表に掲げたのは香港で放送された探偵・刑事ドラマの一部である。このうち、『刑事くん』の主演者であった桜木健一は大人気な俳優で、その上内容もコミカルで、好評を博した。そして、『刑事くん』と題材的に類似している『敬礼！さわやかさん』も輸入された。

一方、刑事ドラマ以外に、異色的な探偵ドラマも流行っていた。日本は明治時代から探偵がすでに存在していたため、これをめぐって作られた小説、映画、ドラマなどは数え切れないほどある。中国の大陸と異なり、香港では探偵という職業は合法である。日本でも大ヒットした香港映画『Mr. Boo! ミスター・ブー』<sup>[51]</sup>の許冠文（マイケル・ホイ）が演じた役は、ある私立探偵事務所の社長であった。

これらの日本製テレビドラマ中で、『G メン' 75』は特筆に値する。香港は『G メン' 75』のロケ地として、ドラマの中にしばしば出てきた。さらに、香港当時のアクションスターであった梁小龍（ブルース・リャン）、陳恵敏（マイケル・チャン）、陳觀泰（チン・カンタイ）、そして女優の米雪（ミッチェル・イム）などはこのドラマにゲスト出演もしていた。スリルに富んだストーリーと時々出演する馴染みの香港本土のスターは、視聴者の心を捕らえた。

また、日本製刑事・探偵ドラマの成功から示唆を受け、香港の各テレビ局は香港式の刑事ドラマ「警匪劇（ギャングドラマ）」を作った。「警匪劇」は、正義側と悪役の間に繰り返される対決を描写する劇種である。警察は常に正義側の代名詞として描かれている。それゆえ、警察を題材とした数多くのドラマは香港で衰えない人気を誇っていた。さらに、すべての「警匪劇」に勧善懲悪の価値観が受け継がれているので、香港市民の期待に応えていた。この点に関しては、日本製刑事・探偵ドラマも共通していると思われる。

## 第4章 香港における受容状況

### 4.1 独特な香港題名と不自然な紹介文

#### 4.1.1 香港式の訳名

香港の外国から輸入された映画とテレビドラマの訳名については、かつてより興味深いと思っていた。香港の文化と広東語に理解できない人にとっては、これらの訳名がナンセンスで、わけのわからないと感じるだろう。たとえば、黒沢明の名作『七人の侍』<sup>[52]</sup>は中国の大陸ではそのまま『七武士』と直訳されたが、それに対して香港では『七侠四義』という訳名で上映された。なぜこのような「武侠風」の名前になるのか、おそらく当時の訳者が中国の古典小説『七侠五義』に因んで命名したからだろう。「五義」から「四義」に変えた理由は、たぶん映画の結末は七人の侍に四人が「就義」<sup>[53]</sup>したからであろう。映画以外に、日本製テレビドラマの訳名でもこのような現象が存在している。以下に五つのパターンを示そう。

①直訳：『彗星女郎』（日本題名：『コメットさん』）、『二人世界』（日本題名：『2人世界』）、『吾妻十八歳』（日本題名：『おくさまは18歳』）、『隠密剣士』（日本題名：『隠密剣士』）など。

②広東語発音に関係する訳：『小露寶』（*siu<sup>2</sup>lou<sup>6</sup>bou<sup>2</sup>*）<sup>[54]</sup>の広東語発音は日本語「ロボコン」の「ロボ」と非常に類似している。

③四字熟語：『佳偶天成』（日本題名：『3人家族』）、『望子成龍』（日本題名：『たんとんとん』）、『鸞鳳和鳴』（日本題名：『お嫁さん』）、『前程錦繡』（日本題名：『俺たちの旅』）『荳蔻年華』（日本題名：『小さな恋のものがたり』）

④慣用句：『外甥多似舅』（日本題名：『パパと呼ばないで』）

⑤他の独特な訳名：『超人歴險記』（日本題名：『帰ってきたウルトラマン』）、『電腦奇俠』（日本題名：『人造人間キカイダー』）、『綠水英雄』（日本題名：『金メダルへのターン！』）、『龍虎羣英』（日本題名：『キイハンター』）、『猛龍特警隊』（日本題名：『Gメン'75』）

ここで③④⑤について具体的に説明したい。まず③の四字熟語の多用である。上記した通りに、訳名として使う言葉は大体縁起のいい言葉である。たとえば、「佳偶天成」は「りっぱな似合いの夫婦；新婚を祝う言葉」<sup>[55]</sup>で、恋愛、結婚物語に極めて似合うと思っている。「望子成龍」は「子供が立派な人物になることを願う」<sup>[56]</sup>で、もとの日本題名とは関係ないが、母親と高校生の子供の間の付き合いを語るドラマなので、この中国式の温情を含める言葉を選んだ。「前程錦繡」は「有望な前途；美しい未来」<sup>[57]</sup>の意味である。だが、ドラマ自身が4人の若者を中心にし、大学を卒業してから就職しがたい状態に陥った彼らの人生と葛藤する姿を描写するものである。完全な逆の意味を持っている言葉を訳名としていることにはいささか皮肉が感じられる。次は④の「外甥多似舅」である。本来の意味は「甥が多くおじに似る；血の繋がっているものは似たところがある」<sup>[58]</sup>だが、実は『パパと呼ばないで』は姪とおじさんの温かい愛情を描いている。



最後の⑤の訳名はスポ根、特撮および刑事・探偵ドラマを主とする。例えば、「緑水英雌」の「英雌」はおそらく訳者の作った造語ではないだろうか。もともと「英雄」ではなく、主人公の全員が女性なので、雄を雌に置き換えた。また、特撮ドラマに、「〇〇超人」「〇〇侠」のパターンが多い。例を挙げた『電腦奇俠』は本来の題名と全く繋がっていない。人造人間を直訳すれば「機器人（ロボット）、生化人（サイボーグ）、人造人（人造人間）」などの語が当てられるが、多分当時の科学技術のレベルでは、「電腦（コンピュータ）」がすでに高水準の代表だったため、訳者はそういう名前をつけたのであろう。さらに、刑事・探偵ドラマの訳名に、例の通りによく「龍」「虎」「英」などという字が含まれる。これらの字の使用を通して、主人公の勇敢を強調しているのではなかろうか。この五パターン以外、特撮ドラマの訳名にしばしば出てくる「〇〇侠」はおそらく 70 年代の「武俠映画」の風潮の影響を受けているのだろう。

さて、香港は様々な地域の人に住んでいる地域なので、使っている言葉も多種である。なお、香港における書き言葉が 1950 年代に流行っている「三及第」文体（「文言」「白話」「広東語（粵語）」の三種類を指す）から 1970 年代の「新三及第」（「白話」「広東語（粵語）」「英語」の三種類を指す）文体に変えた<sup>[59]</sup>。「三及第」であれ、「新三及第」であれ、どちらの文体にも「白話」と「広東語（粵語）」の比重が高い。前述した日本製テレビドラマの訳名の訳者たちも当時 70 年代の文体を参照しながら、作っただろう。そのため、中に香港人しか理解できない言葉が含まれている。この点もローカライズの一つの重要な証拠である。

#### 4.1.2 不自然な紹介文

「無線」の機関紙『香港電視』誌に載った番組表に、ドラマの題名の前に香港式の角書きがついている。興味深いのは、紹介文とドラマの内容の間に微妙な差があることだ。この差の表現と生じる原因を具体的に分析する<sup>[60]</sup>。

中文タイトル	中文紹介文
①『青春火花』（『サインはV』）	社會輕鬆文藝片集
②『紅粉健兒』（『美しきチャレンジャー』）	社會輕鬆文藝片集
③『柔道小金剛』（『柔道一直線』）	日本倫理奇情片集
④『雌雄殺手』（『女殺し屋花笠お竜』）	日本古裝武俠片集
⑤『大内煞星』（『大江戸捜査網』）	日本古裝打鬥片集

⑥『一剣走天涯』（『無用ノ介』）	日本古裝武俠片集
⑦『慧星女郎』（『コメットさん』）	日本神怪奇情片集

【表 9：『香港電視』誌に見る日本製テレビドラマの紹介文】

まず、各ドラマの粗筋を簡単に述べる。

①『青春火花』（『サインはV』）

バレーボールを題材とした青春物語である。バレーボールの天才選手としての主人公朝丘ユミは失敗と成功を繰り返しながら、メンバーたちとの間の友情も一層強くなっていく。劇中の必殺技「稲妻落し」、「X 攻撃」は当時話題になった。

②『柔道小金剛』（『柔道一直線』）

主人公一条直也の父は 1964 年オリンピックの柔道の試合中に思わず不幸に遭って亡くなった。彼は復讐のために、師匠・車周作の指導下で、「地獄車」、「海老車」などの必殺技を学んで、日本のライバルや外国人の柔道家を倒しつつける。

③『紅粉健児』（『美しきチャレンジャー』）

ボウリングが好きな主人公小鹿みどりは高校を卒業してから、会社の所属のボウリング部に加入する。そこで、コーチと一緒に開発した必殺技「ビック 4 クリア」で試合に参加し、失敗と成功の繰り返しで成長を得る。

④『雌雄殺手』（『女殺し屋花笠お竜』）

女殺し屋花笠お竜が「仕込み三味線」を武器とし、仲間と一緒に世間の不公平を解決する。義理と人情の時代劇である。

⑤『一剣走天涯』（『無用ノ介』）

孤児として育てられた片目の浪人志賀無用ノ介は賞金を稼ぐために、自分で作った「野良犬剣法」で悪人と戦う。

⑥『大内篤星』（『大江戸捜査網』）

江戸を背景とする時代劇である。秘密捜査団体「隠密同心」のメンバーたちは、変装、潜入などのいろいろな手段を使って、事件の裏に潜んでいる悪を斬る。

⑦『慧星女郎』（『コメットさん』）

星の国からやってきた少女コメットさんは魔法を使って、地球で困っている人を助ける。

①②③は「スポ根」ドラマのジャンルに属することがはっきりとしているが、紹介文が内容と相当離れている。各物語の粗筋から見ると、「試合」、「必殺技」などのキーワードが含まれ、「輕鬆（気楽に楽しめる）」というわけにはいかない。そもそも「文藝（文学的、芸術的）片」は重厚、高尚なイメージを伝え、「スポ根」ドラマと関係づけにくい。③の『柔道小金剛』（『柔道一直線』）の紹介文「日本倫理奇情片」に対して最も違和感

を感じる。「倫理片」は倫理をテーマとする作品で、一般的には家庭及び社会問題をめぐるジャンルである。また、「奇情」の特徴は物語に、珍しく、不思議なプロットを入れることで、柔道のようなスポーツ題材のドラマにつけることは滅多にない。

一方、④⑤⑥は時代劇で、紹介文では「古裝」という言葉が共通している。これは簡単にいえば、「昔の服装」の意味で、「古裝片」は「時代劇」を指している（ドラマ、映画共に使用）。また、「武侠片」は香港映画とドラマにありふれたジャンルで、主人公が俠客で、俠義を描いた時代劇である。④⑤の紹介文は同じで、⑥の『一劍走天涯』（『無用ノ介』）のみが「打鬥」を「武侠」に入れ替えている。その原因は恐らく④⑤と比べ、⑥に殺陣のシーンが多いためかもしれない。⑦の『コメットさん』は本来 SF 色彩に富むホームドラマだが、紹介文に「神怪」をつけられた理由は香港で一時流行っていた「武侠神怪片」（1960、70 年代に盛んになった映画の一ジャンル<sup>[61]</sup>）と関係あるだろう。一般の「武侠片」とくらべて、「武侠神怪片」の最大な特徴は特撮技術の多用である。また、「神怪」は字面で神仙と関連付けやすい。『コメットさん』は主人公が星の国から地球に来たという設定で、多分神仙のイメージが連想されたのだろう。

では、なぜこの差が生じたのか、紹介文の作成者に責任があるかもしれない。編集者はおそらく輸入されたドラマを見ておらず、ただドラマの粗筋をみただけで、わかりやすい紹介文を作らなければならないために、当時香港で流行っているドラマジャンルに無理矢理にはめ込んだのであろう。たとえば、③の『柔道小金剛』（『柔道一直線』）の物語に「復讐」の部分があるので、「倫理」を付けた。また、「地獄車」「海老車」などの常識を超える必殺技の名前の影響で、「奇情」を加えたのであろう。

## 4.2 視聴者の反響

### 4.2.1 視聴率ランキング

ここでは 1970 年代に実施された視聴率調査に基づいて、日本製テレビドラマの人気を検討したい。

まず、1972 年 1 月 6 日—1 月 12 日（第 217 期）<sup>[62]</sup>の『香港電視』は読者投票による「テレビ番組人気トップ 10」調査結果を掲載した。トップ 10 に選ばれたのは「バラエティ番組：『歡樂今宵』、『花王俱樂部』、『雙星報喜』、『皆大歡喜』、『聲寶之夜』；外国ドラマ：『青春火花』（日、原題：『サインは V』）、『合家歡』（米、原題：『Family Affair』）、『聯邦密探隊』（米、原題：『The F. B. I.』）、『神偷謀影』（米、原題：『It Takes A Thief』）、『雌虎雙雄』（米、原題：『The Mod Squad』）」であった。この結果に対し、編集部が以下のような評論文を添えた。

今回の読者の投票結果から一つの際立った現象が見出せる。「無線」の自作番組であれ、外国のドラマであれ、トップ 10 の番組は全部カラー番組である。これはおそらく香港人の生活レベルが次第に向上し続けて、視聴者の鑑賞レベルも向上し続けており、カラーテレビが次第に市民たちに重視されるようになったからである。それゆえ、1972 年にはカラーテレビがさらに普及し始め、売り上げも大幅

に上がると推測できる。……五つの最も人気ある外国ドラマのうち、『サインはV』と『Family Affair』は人情味に富んでいるので、各階層の人に好かれていたとしても不思議ではない

（從這一次讀者們的投票結果，可以見到一個很突出的現象；榮登「最受歡迎十大節目」的十個節目，無論是無線電視實地播映的精心製作，還是外國的精彩片集，全部都是彩色的節目。這也許是因為香港人的生活水準不斷改善，欣賞電視節目的藝術眼光不斷提高，彩色電視漸漸已受到市民重視的緣故。因此，預期在一九七二年開始，彩色電視將更為普通，而彩色電視的銷數也將作大幅度增加了。……五個最受歡迎的外國片中，「青春火花」和「合家歡」最富人情味，深受各階層人士歡迎是絕不為奇的。……）

この記事から二つの点が指摘できる。一つ目はカラーテレビが白黒テレビに取って変わり始めていることである。二つ目は『サインはV』を代表とする日本製テレビドラマが香港で人気を呼んでいることである。

その4年後の状況を見てみよう。『明報』は1976年10月29日金曜日の第10版に視聴率に基づくテレビ番組の上位20位までのランキングを掲載した。表10がそれである。表10のうち、第12位『猛龍特警隊』（原題：『Gメン'75』）と第16位『青春校園』（原題：『おこれ！男だ』）は日本製ドラマである。一見すると、この順位はトップ10に入っていないため、好成績ではないと思われるかもしれない。しかし、70年代の中後期になると、香港本土のテレビ局側の設備や人材など、量、質ともに次第に向上したため、外国からの番組への依存度が下がっていた。例をとってみれば、トップ10位は全部香港現地の自力で製作した番組である。また、このランキングは部門別によるものではなく、ドラマやニュース、バラエティ番組などを混ぜた統計結果である。たとえば、1位の『歡樂今宵』は「無線」開局とほぼ同時に放送が開始された国民的なバラエティ番組で、人気を誇る。要するに、70年代半ばには、激しい競争の中、日本製テレビドラマがトップ20に入ること自体、たやすいことではなかったである。

全港二十個最受歡迎電視節目*					
節目名稱	觀眾數字		節目名稱	觀眾數字	
1. 歡樂今宵	1,732,000	翡翠台	11. 相見好	1,334,000	翡翠台
2. 阿Q正傳	1,544,000	翡翠台	12. 猛龍特警隊	1,328,000	翡翠台
3. 無花果	1,511,000	翡翠台	13. 獅子山下	1,225,000	翡翠台
4. 雲絲頓73	1,494,000	翡翠台	14. 三代同堂	1,218,000	翡翠台
5. 民間傳奇	1,484,000	翡翠台	15. 保鏢	1,221,000	翡翠台
6. 翡翠劇場	1,481,000	翡翠台	16. 青春校園	1,203,000	翡翠台
7. 龍虎豹	1,458,000	翡翠台	17. 夕陽無限好	1,174,000	翡翠台
8. 新聞及天氣報導	1,456,000	翡翠台	18. 影視廣告雜誌	1,167,000	翡翠台
9. 家家有本難唸的經	1,424,000	翡翠台	19. 好時光	1,150,000	翡翠台
10. 溫拿狂想曲II	1,419,000	翡翠台	20. 少年十五二十時	1,063,000	翡翠台

\*以每十五分鐘最高收視率計算

【表 10: 香港人気テレビ番組トップ 20】

#### 4.2.2 視聴者からの投書

次に、『香港電視』の「有彈有讚」（視聴者の投書欄）の投書を通して、当時の視聴者が日本製テレビドラマに対して一体どのような評価をしていたかを探ってみたい。毎号の「有彈有讚」に5、6通ぐらいの投書が掲載されている（少ない時に2通の場合もある）。筆者が資料として使用した1970年—1976年の『香港電視』（一部）から見れば、毎号の投書のうち少なくとも1通に日本製テレビドラマについての内容がある<sup>[63]</sup>。以下は「有彈有讚」の投書案内である。

①このコーナーへの投書は大歓迎で、テレビ番組についての意見があれば、賞賛、批判どちらでも構いません。ただし、投書による個人攻撃はご遠慮願います。

（本版歡迎讀者投稿，舉凡對電視有建設建議或批評，不論讚與彈均所歡迎，但來信不能作人身攻擊。）

②投書原稿を両面に書かないようにし、千字以内としてください。

（來稿請勿一紙兩面寫，並請勿超過一千字。）

③投書原稿はペンネームで発表できますが、本名と住所を記してください。

（來稿可用筆名發表，但請附上真實姓名及地址。）

④投書原稿は、七姊妹道196号11F、香港電視編集部宛てに郵送してください。

（來稿請寄七姊妹道一九六號十一樓，香港電視編輯部收。）

この案内文からすると、『香港電視』の編集部は積極的に視聴者の投書を受け入れている。また誹謗中傷によるトラブルが発生しないように事前にきちんと対策を講じていることもわかる。

ここから視聴者の5通の投書を選んで、分析してみよう。

①『父子情深』はすばらしい！

翡翠台が放送している日本製テレビドラマは多すぎる。土曜日に放送している『金メダルへのターン！』は、趣旨はいいが、あまりに長い。しかも、ドラマに出てくる「飛び魚ターン」や「渦巻きターン」などは荒唐無稽な技で、本物の水泳選手ならやらない。子供たちが見て、本当だと思って真似したら大変なことになるかもしれない。以前放送した『サインはV』での「稲妻落とし」、「X攻撃」なども超人的すぎて、実際にそぐわない。（第288期1973年5月17日—5月23日）<sup>[64]</sup>

（『父子情深』好！

翡翠台日本片集太多。星期六播映之「綠水英雄」雖主題不錯，但太長，內中之「飛魚轉身」、「漩渦轉」等是旁門左道，非正式游泳人士所取。兒童看後可能會信以為真，依樣學樣則非好事。以前「青春火花」片集中之「鬼影變幻球」、「移形換影」等亦過於神化，不合實際。）

②日本製テレビドラマはすばらしい

貴局の放送した日本製テレビドラマは非常に素晴らしいから、たくさん購入して欲しい。とくに『女殺し屋花笠お竜』、『サインはV』と『無用ノ介』がとてもいい。『サインはV』は健全な教育の意義に富んでいて、青年の向上心を激励するから、放送回数を増やして欲しい。週二回が好ましい。また、『無用ノ介』の放送時間を夜11時過ぎに変更するのはもったいない。なぜなら、この時間には視聴者たちはすでに寝ており、見て楽しむチャンスを逃しているので、放送時間をすぐにでも早めにしてほしい。（第193期1971年7月22日—7月28日）

（日本片集非常精采

貴台所播的日本片集，非常精采，望大量購入。其中尤以『雌雄殺手』『青春火花』及「一劍走天涯」為甚。「青春火花」富健康教育意義，鼓勵青年向上心，望增加播映次數，以一週兩次為佳。近貴台把「一劍走天涯」片集，改在十一時多播出，實太浪費，因大多觀眾已睡了，痛失欣賞機會，望速提早播映時間。）

### ③『無用ノ介』はつまらない

『サインはV』はバレーボールをテーマとするドラマで、青春まっただ中の少女たちが優勝するために努力し、辛抱強く頑張っている物語だ。見逃せない素晴らしいドラマである。『無用ノ介』はつまらないドラマだ。なぜなら、2人の剣術の達人が対決するシーンでは、必ず一回か二回技を繰り出ただけで、すぐ死んでしまう。また、『ウルトラマン』は良くない。あの怪獣たちは、一目で人が演じているとわかる。そのため、『ウルトラマン』の放送を停止し、『ウルトラQ』を再放送してはどうだろうか。（第190期1971年7月1日—7月7日）

（「一劍走天涯」無味

「青春火花」是一部以排球做背景的片集，內容是說一羣青春的少女，努力向上，艱苦奮鬥，希望能爭取到冠軍，是一部不可錯過的片集。「一劍走天涯」，是一部無味道的片集，因為兩個高手交手的時候，一定是一招兩招便立刻死去。「超人」片集不佳，因為那些怪獸，一看便知道是人做的，可否取消「超人」，重播「地球保衛戰」。

### ④『座頭市』に期待する

貴局が『座頭市』シリーズを放送することを知った時に、非常に嬉しく思った。『座頭市』のファンにとって、これはとても良いニュースだ。勝新太郎の演技は最高の域に達していると言えるほどで、彼の一つ一つの動作すべてに演技力があって、全て素晴らしい。特に言葉の間に表現された真摯な感情は劇中の純朴で、面白味に富みかつ豊かな感情を持っている「座頭市」という人物を余すところなく表現している。（第237期1972年5月25日—5月31日）

（喜見「盲俠」

當我知道貴台準備一連串推出「盲俠」片集時，我覺得非常高興。因為這對於每一個盲俠迷都是一個好消息。勝新太郎的演技真可說達到爐火純青的地步了，他一舉

手一投足都是戲，缺一也不可，尤其是於其言語之間所表現的真摯感情，使戲中純樸，風趣而又感情豐富的「座頭市」，表現得淋漓盡致。）

⑤『3 人家族』を再放送してほしい

私は『3 人家族』、『サインはV』、『美しきチャレンジャー』の三つのドラマが大好きなので、貴局に『3 人家族』を再放送してほしい。このドラマの内容は肩が凝らない。主演男優の施徳明（竹脇無我）は優雅でハンサムで、典型的な美男子だ。主演女優の敬子（栗原小巻）はきれいで可愛くて、素振りも自然で、演技力も素晴らしい。二人はとってもよく似合う。（出典は④と同じ）

（我希望重播「佳偶天成」

我最喜歡「佳偶天成」「青春火花」「紅粉健兒」這三個片集，所以我希望貴台能夠重播「佳偶天成」片集，這片集內容輕鬆。男主角施徳明（竹脇無我），斯文英俊，是一位典型的美男子。女主角敬子（栗原小巻），樣子漂亮可愛，態度自然，演技甚佳，兩位非常登對。）

これらの投書をまとめると、大雑把に言って二つの事実が明らかになる。一つ目は当時、日本製テレビドラマを好んだ視聴者が少なからずいたことである。視聴しているドラマの題材の幅も広く、特にスポ根ドラマとホームドラマの人気は軽視できない。

二つ目は以前の研究においてしばしば見過ごされてきた点であるが、香港における日本製テレビドラマに対する否定的な評価である。否定的なコメントは主に二点である。まずは①で示されたように、スポ根ドラマに存在する荒唐無稽な技に対する軽蔑と不信である。次に、同様に①に示された子供の模倣行為に関する懸念である。しかし、これは余計な心配ではなかったと思われる。70 年代初頭には、『仮面ライダー』シリーズが香港のテレビで爆発的な人気を呼んで、熱中した子供ファンが、まねをして窓から飛び降りる事故が続発、ついに放送中止になったほどであった<sup>[65]</sup>。社会学者井上宏は、テレビが子供の行動に与えた影響について次のように述べている。

映像における「投射＝同一化」、「想像上の融即」の働きは、見る人々のなかに、行動へのエネルギーを蓄積する。このエネルギーは、無条件に放出されるというものではなく、子供ように、“ごっこ遊び”で単純に放出するのもあるが、多くは心理的な抑制が働いて内に眠らされてしまうことになる。しかし、それは、なんかのきっかけ、チャンスが与えられれば行動となって顕在化する可能性をもっていると考えられる<sup>[66]</sup>。

前述した事件は、子供はもともとごっこ遊びが好きで、そのうえ、『仮面ライダー』を見ることをきっかけに、子供にとって、仮面ライダーは空に飛べるので、自分もできたらうと、イメージと現実を混同し、区別できずに最後惨劇となってしまった。したがって、投書①は同じジャンルである『ウルトラマン』が引き起こる事故を懸念したのだろう。

要するに、当時香港では日本製テレビドラマは好成績を取った一方で、マイナス評価も実際に存在したのである。しかも、筆者の手元の『香港電視』に掲載されている「有弾有讚」に限っていえば、日本製ホームドラマに関してはほとんど好評だが、一方で日本製特撮ドラマに対してはマイナス評価が多く、「スポ根ドラマ」についての評価は好評と悪評が両方ある。

ところで、視聴者以外に、放送業界に対して日本製テレビドラマはどのような影響を与えたのか、次節ではこの点について論述したい。

### 4.3 香港現地の放送事業に与えた影響

#### 4.3.1 剽窃の疑い

香港本土のドラマは一体どの程度に日本製テレビドラマを参考にしたのでろうか。呉偉明は香港で製作されたドラマについて、日本製ドラマからの剽窃の疑いを指摘している。呉の指摘と分析をまとめると、表 11 のようになる<sup>[67]</sup>。

香港	日本	疑惑点
出線（1981 年、麗的）	サインは V	全体的なプロット
恋愛自由式（2003 年、無線）	金メダルへのターン！	主人公の使う必殺技の呼び方が近い。日本：「飛魚轉身」（飛び魚ターン）「砲彈轉身」（渦巻きターン）；香港：「破冰轉身」「片石轉身」
撻出愛火花（2000 年、無線）	姿三四郎	柔道についての恋愛物語
乘風破浪（1976 年、無線）	一連の日本製の青春ドラマ	役の設定と物語の内容
無花果（1976 年、無線）		
少年十五二十時（1976 年、無線）		
青春三重奏（1981 年、麗的）		
新紮師兄（1984 年、無線）	刑事くん	青年刑事に関する物語

【表 11：呉偉明によって指摘された剽窃の疑いをもつドラマ】

表 11 のように、剽窃の疑いがあるドラマは主に二種類に分けられる。一つは日本製ドラマの大量に輸入された年代と同じ 70 年代から 80 年代前半にかけて作られたテレビドラマである。もう一つは 21 世紀に入ってから作られたものである。70 年代に各テレビ局



が人気のある日本製テレビドラマを模倣し、参考にしたのは視聴率を上げるために意識的にとられた方法だろう。一方、今世紀に入ってから作品に疑われる剽窃は、無意識のうちになされたものと考えられる。テレビ局内の中核になる 30、40 代の脚本家たちは 70 年代にはまだ子供だった。子供時代に見た日本製ドラマのプロットや役の特徴などが頭に残り、知らず知らずのうちに、創作に取り入れた可能性がある。

これらの剽窃に対する指摘について、脚本家たちはどのように考えているのだろうか。葉嘉欣は香港の脚本家 A 氏に取材したことがある。A 氏は剽窃に関する問いに対し、次のように答えている<sup>〔68〕</sup>。

私たちは絶えず吸収しなければなりません。私たちがいる香港は小さなところですが、世界中のテレビドラマは製作される時には、一定の原因と役割があるのです。ですから、私たちは様々なドラマを見ています。……私たちは絶えず参考になりますが、自分の物語を創造し、他のドラマのプロットの信憑性を考える作業を自分に課しているのです。とすると、どうして剽窃だといえるのでしょうか。日本製テレビドラマを見たことがある事実は否定しません。もしも『一リットルの涙』と『花より男子』の大ヒットを無視してしまったなら、それは私の手落ちとなるのです。私はこの業界に居るのですから、もしも吸収せず、新しいことを知ろうとせず、相変わらず金庸の作品だけを読んでいるだけでは、すばらしい武侠ドラマの脚本を書けるのでしょうか？

（我們要不停吸收，因為我們在香港，這個世界是很小的，但是全世界的劇集，在創作時都有一定的原因及定位，所以我們便會去看。……我們要不停去參考，但是我們都要再自己去創作自己的故事性及考量其他劇集中的橋段真偽性，那又怎算是抄。……我不否認我一定有去看日劇，如果『一公升的眼淚』及『流星花園』的成功，我不去看，是我的錯，因為我再做這一個行業，我不去吸收，不去認識新事物，仍然只看金庸，我是否就能編出好的武俠劇？）

A 氏は、単純に香港のテレビドラマにいくつかの日本製テレビドラマと類似することがあるからといって、そのドラマが剽窃作だと断言するのは不適切だと思っている。しかしながら、香港現地の脚本家の創造性の乏しさが実際に指摘されている以上、彼らが独自の脚本を創出せねばならない課題をかかえているのもまた事実である。

#### 4.3.2 日本製テレビドラマと香港「喜劇王」周星馳

以上、香港のテレビドラマについて見てきたが、ここではその周辺に位置する香港の映画制作に目を向けたい。香港を代表する映画監督・俳優の周星馳（チャウ・シンチー）は、自分の作品の中に日本製テレビドラマの要素を数多く用いている。

周星馳は、1962 年 6 月 22 日香港に生まれた。1981 年、高校卒業後、「無線」の俳優養成所を受験したが不合格となり、「無線」の夜間訓練所に入った。1983 年、訓練所を卒業し、のち、子供番組『430 穿梭機』<sup>〔69〕</sup>の司会に抜擢された。彼の風格は極めて爽やかで、

子供に好かれ、人気が出たという<sup>[70]</sup>。司会者を担当しながら「無線」のテレビドラマにも出演していた。しかし、演じた役は大した役ではなく、ほぼ端役のみであった。5年ほどの下積み期間を経て、1988年、有名な俳優、監督の李修賢（ダニー・リー）の誘いを受け、『霹靂先鋒』<sup>[71]</sup>に出演した。この作品が初の映画デビュー作とされている。

90年代に入ると、彼が主演をつとめた傑作が次々に現れたので、観客動員を約束された俳優として、周潤発（チョウ・ユンファ）、成龍（ジャッキー・チェン）と「雙周一成（2人の周、1人の成）」と合わせて称される<sup>[72]</sup>。

また、周星馳はしばしば「無厘頭」映画の大成者と呼ばれている。「無厘頭」は本来広東仏山市の俗語の一つで、「わけがわからない。でたらめである。ちゃらんぽらんである。ナンセンスな」<sup>[73]</sup>という意味である。一説によれば、「無厘頭」映画の源流は1930、40世代アメリカのスクリーボール・コメディとされる<sup>[74]</sup>。このスクリーボール・コメディとは、『日本大百科全書』によればこうである。

コメディ・ジャンルの一つ。1930年代なかばから1940年代前半にかけてハリウッドで盛んにつくられた。「スクリーボール」とは「変わり者」の意。スクリーボールな男女の破天荒な行動が大騒ぎを巻き起こすもので、基本は男女が最後に結ばれるロマンティック・コメディ。作品によって社会風刺的性格が強いものもあれば、アナーキーでナンセンスな笑いが主眼になっているものもある<sup>[75]</sup>。

ここで「無厘頭」の話に戻ると、そのテーマは現実の生活や権威、秩序などに対して、ちゃかすような態度でストーリーを展開することである。また、譚詠明は「無厘頭」映画はポストモダニズムと強く結びついており、脱構築の特徴が鮮明であると指摘している<sup>[76]</sup>。

周星馳は1994年、『國產凌凌漆』<sup>[77]</sup>で監督としてデビューした。1996年、自分の映画製作会社、星輝海外有限公司を設立した。そして、『食神』<sup>[78]</sup>『喜劇之王』<sup>[79]</sup>などの監督を務めた。それらの集大成として製作した『少林足球』<sup>[80]</sup>は空前の人気を博した。1997年のアジア通貨危機以来、経済不況が続いていた香港の人々は、この映画が発した「逆境にあっても頑張れる」というメッセージに励まされたのである<sup>[81]</sup>。

『少林足球』は第21回の香港電影金像獎（香港のアカデミー獎）で7部門（作品賞、監督賞、主演・助演男優賞、傑出青年監督賞、特集視覚効果獎、音響効果獎）を制覇した。興行成績では、香港中国語映画史上最高の興収6,000万香港ドルを突破した<sup>[82]</sup>。本作品は2002年、日本で上映された際にも、総興行収入30億で、年間第8位を記録した。このことからわかるように、香港のみならず、日本でも周星馳の作品は観客に愛されている。その理由はもしかして『少林足球』の中に存在している大量の日本文化に関する要素かもしれない。映画評論家の余暉は「香港喜劇電影的危機——周星馳対周星馳」において、次のように指摘した。

『少林足球』に現れた「周星馳現象」はそれ以前の周星馳映画の売れる要素に欠ける。……香港の現地の文化は見えなくなり、逆に彼の映画の内在的要素は日本文化によって取って代わられている。たとえば、『少林足球』の始めと終わりは『魔女宅急便』<sup>[83]</sup>の変形で、中間の部分は『五個相撲的少年』<sup>[84]</sup>と似ており、起承転結のはこびは『足球小将』<sup>[85]</sup>とそっくりだ。

（不過《少林足球》所顯現的「周星馳現象」，卻缺少了上述所說的周星馳的成功要素……看不見香港的地道文化，更重要是周星馳的電影的內涵及元素，竟不知不覺被日本文化所取代。《少林足球》的首尾是《魔女宅急便》的化身，它的過渡是《五個相撲的少年》的骨架，它的轉及結是《足球少將》的形體。）

確かに、余氏が指摘したように日本製映画、漫画と類似する点が多い。しかし、映画と漫画より、筆者がここでさらに指摘したいのは、テレビというメディアを通して目にしたスポ根ドラマからの影響を見出せるのではないかということである。実は、『少林足球』はスポ根ドラマの特徴と重なるところが少なくない。それから最も顕著なのは試合のシーンである。激しさを強調するために、CG 技術で数多くの現実離れした場面を作り出している。例を挙げると、蹴り上げたボールが壁にめり込んだり、ゴールキーパーが一球ごとに体を変形させてゴールを守るなどである。これらの点はスポ根テレビドラマにおける必殺技のように、実現しえないものである。

また、2014 年 11 月日本で公開された周星馳監督の最新作『西遊記～はじまりのはじまり～』<sup>[86]</sup>にも、日本製テレビドラマの受容が至る所に見られる。妖怪ハンター達が、脱出した孫悟空と戦う際に使用された BGM は『柔道一直線』のものである。映画の最後のシーンで、三蔵法師が弟子四人を連れ天竺に向かう BGM には「G メン' 75 のテーマ」が使われている。2014 年 7 月に開催した“GOLDEN ASIA”のラインナップ発表会において、周は「僕自身が『G メン' 75』の大ファンだからです。それと、三蔵法師が 3 人の弟子を連れて悪者を退治するというのが、G メンと合っていると思ったからです」と述べた<sup>[87]</sup>。

ちなみに、もう一作の『破壊之王』<sup>[88]</sup>における主人公の格好は『ウルトラマン』の啓発を受けているのは一目瞭然である。（図 1）

周星馳の子供時代はちょうど日本製テレビドラマが香港に大量に輸入された時期である。毎日テレビをつければ、日本製テレビドラマを目にする。そのような環境にあつては、自覚せずにこれらのドラマに含まれる要素を自らの作品に取り入れることもあるだろう。



図 1: 『破壊王』の DVD カバー

#### 4.3.3 その他

香港映画には、70年代の日本製テレビドラマに着想を得ているものが少なくない。例えば、1994年に上映された『青春火花』<sup>[89]</sup>は1970年に「無線」で放送された『青春火花』（『サインはV』）と全く同じ題名である。この映画もバレーボールを中心にし、若者同士の友情と団結を謳歌している。作中に用いられた必殺技も『サインはV』のものと似ている。その上、『青春火花』の英語題名は『Victory』であり、日本の原作名『サインはV』を彷彿させるのである。

また、2004年の『柔道龍虎榜』<sup>[90]</sup>はもう一つの代表的な例である。2004年はちょうど重症急性呼吸器症候群（SARS）騒ぎの終わったばかりの時期だ。当時の香港経済はまだ不況が続いていた。監督である杜琪峯（ジョニー・トー）は取材を受けた際に、この映画によって、当時の希望を喪失した香港市民を激励したいと語った<sup>[91]</sup>。おそらくこの映画に反映された奮闘精神は「スポ根テレビドラマ」と共通しているだろう。この映画の最後の画面において、杜は黒沢明の『姿三四郎』へ敬意を表すために作った作品であることを表明している。だが、原作名『姿三四郎』を使わず、1970年代「無線」によって輸入された日本製テレビドラマの訳題『柔道龍虎榜』を用いている。さらには、作中の主人公のあだ名は「柔道小金剛」で、これはもう一つの柔道を題材とする日本製ドラマ『柔道一直線』の香港題名である。また、杜が映画『柔道龍虎榜』に用いた挿入歌は1973年、香港の人気歌手徐小鳳（ポーラ・チョイ）がドラマ『柔道龍虎榜』のテーマ曲をカバーし、その年のヒット曲に入選した曲である。こうしたノスタルジック製作は、中年の観客に懐かしさを感じさせたことだろう。

スポ根ドラマ以外に、『ウルトラマン』シリーズを代表とする日本製特撮ドラマが香港で大ヒットした影響を受け、ショウ・ブラザーズ（邵氏兄弟（香港）有限公司）が特撮映画の製作で様々な試行を行った。しかし、撮影技術がまだ未成熟だったため、70年代に作られた特撮映画、たとえば『中国超人』<sup>[92]</sup>『猩猩王』<sup>[93]</sup>などの作品は不足する点が多かった<sup>[94]</sup>。

映画以外に、70年代の香港バラエティ番組にも日本製テレビドラマの影響がよく見られる。たとえば、香港コメディ映画史上、大物とされる許冠文（マイケル・ホイ）とその弟許冠傑（サミュエル・ホイ）が共同出演したバラエティ番組『双星報喜』<sup>[95]</sup>に、日本に関係するギャグがよく出ている。例えば、あるコントでは、日本の柔道家に扮した人物が登場し、彼らとドタバタ喜劇を繰り広げた。これは当時の『柔道一直線』など柔道ドラマと関係があると考えられる。

日本製テレビドラマの輸入は主演俳優が出演した映画の輸入を促進した。例えば、テレビドラマ『佳偶



【図2:『我想結婚』の宣伝ポスター】

天成』(『3人家族』、『二人世界』(『二人の世界』))によって香港で知名度をあげた竹脇無我が主演を演じた映画『我想結婚』<sup>[96]</sup>は、日本で上映されて、間もなく香港に輸入された。図2は『明報』に掲載された宣伝ポスターである。ポスターに記されたキャッチコピーには「盛況空前破晒紀錄(空前の盛況で、記録を破る)」、「避免過分擁擠敬請提前訂座(混んでいる場合があるので、早めにチケットをお取りください)」とあり、この映画の人気のうかがわれる。また、コピーに記された『佳偶天成』、『二人世界』、『姿三四郎』は全部竹脇無我が主演を務めた作品で、わざわざここでこれらの作品名を使うのは、おそらくこれらの番組の視聴者を集めるためであったことだろう。

#### 4.4 日本ブーム

##### 4.4.1 日系企業の香港進出

日系企業の香港進出を分析する前に、日港関係について述べたい。歴史的要因により、香港における反日感情は戦後も長期間にわたって存在した。70年代に入ると、日本と香港との関係は経済面で緊密に繋がっているのに、反日感情も表面には現れなかったが、時々爆発したこともある。たとえば、1971年には尖閣諸島の領有権の問題をめぐり、一連の事件が起こった。8月13日、ビクトリア公園で1,000人以上が参加した反日デモが行われた。香港大学でも8月22日に学生によって集会が開かれたという<sup>[97]</sup>。興味深いのは、当時の香港人は政治の面では日本に対する不満を持っていたが、経済と文化の交流には悪い影響をあまり与えなかった。日本と香港との経済交流は順調に進められ、香港に投入する資本も増えつつあった。

年度	件数(件)
1951～64	98
1965～69	111
1970～74	608
1975	102
1976	114
1977	110
1978	135
1979	225

【表 12: 日本の香港向け直接投資実績の年度別推移】<sup>[98]</sup>

上の表によると、日本の香港向け直接投資は1951年から1964年までの13年間に延べ98件だったが、1970年から1974年のわずか4年間に608件で、平均毎年150件近くに増えてきた。ところで、日系企業が対港投資をするメリットはどこにあるのか、小島麗逸は以下の3点にまとめている。

一つは自由な経済活動、香港の政府の不干渉政策、輸入税のない自由港など。二つは優れた社会資本、天然の良港と世界一の港湾施設、最高水準の金融機能、優れた通信施設、良質な労働力など。三つ目は結节点的機能、東南アジア貿易の物流中心、中国の「南の玄関口」などである<sup>[99]</sup>。

前述した様々な利点があるので、日本からの投資のみではなく、日系企業も香港に積極的に進出するようになった。とりわけ、日本百貨店について言及しなければならない。

店名	開業年度	閉業年度	場所
大丸	1960 年	1998 年	銅鑼湾
伊勢丹	1973 年	1996 年	尖沙咀
松坂屋	1975 年	1998 年	銅鑼湾

【表 13: 60 年代-70 年代香港で開業した日本系百貨店】<sup>[100]</sup>

表の通り、香港に開店したこの三つの百貨店のうち 2 店の営業地域は銅鑼湾である。そのため、銅鑼湾は当時「小銀座」と呼ばれていた。このうち大丸は日本から進出した最初の百貨店で、オープンした際に大きな反響を呼んだ。初期の客層は中産階級の家と日本人観光客が主だった。商品も大部分は日本産のものであった。これらの商品の販売を促進するために、大丸は商品に関連する展覧会を数回開催した。これによって、香港で日本製の商品と家庭用電化製品のブームが起こった<sup>[101]</sup>。しかし、高価な欧米商品と比べて、日本商品のほうがはるかに安かった。確かに、当時の香港人の日本商品についての印象は「安かろう悪かろう」だったが、それでも安価な日本製テレビの大量輸入は香港のテレビ所有率の大幅増加に大きな役割を果たした。

大丸以外に、1975 年に開店した松坂屋も有名な百貨店だった。70 年代に、日本製テレビドラマの輸入にともない、香港で日本ブームはより熱くなった。そして、日本商品の人気もさらに上がった。松坂屋は大丸のライバルとして、激しい競争を繰り広げた。しかし、日本のバブル経済崩壊の影響に加え、赤字が長期間続いたので、1998 年に香港市場から全面的に撤退した。

商品売り込むために、日本側はいろいろな宣伝の方法を試した。宣伝媒体としての新聞紙、ラジオがもっとも盛んで、そのほかテレビ、ネオンサイン、路面電車に付く看板などがあった。ネオンサインを例にとれば、『アジアの十字路 ―香港』によると、その様子はこのように語られている。

香港島の北岸や九龍の目抜き通りにはネオンサインが立ち並び、夜になるといっせいに灯がついて、100 万ドルの夜景を描き上げるが、こんにちこれらネオンサインの七割ほどが日本商品のネオンになっている。このネオンの放列を見てあるジャーナリストは「香港の東京通り」と感嘆したほどであった<sup>[102]</sup>。

その一方で、テレビ番組にも日本商品や日系企業との関係がみられる。まずは、花王、ソニー、三洋電機など日本企業は番組のスポンサーとして、多くの商品のCMを放送した。『香港電視』には数多くの日本商品の広告が掲載されている。また、当時流行っていたバラエティ番組も日本商品と多かれ少なかれ関係がある。例を挙げてみると、1967年11月25日に放送開始した「無線」のクイズ番組『花王倶楽部』では、花王の商品を賞品として優勝者に贈呈していた。同じく「無線」で1969年に放送が始まった、日系企業シャープをスポンサーとする『聲寶之夜』はNHKの音楽番組『のど自慢』<sup>[103]</sup>を模倣し作った番組だと思われる<sup>[104]</sup>。

#### 4.4.2 日本関係の芸能ニュース

日本製テレビドラマの輸入につれて、日本人タレントについてのニュースも倍増した。これらのニュースは大体二種類ある。一つは宣伝用のニュースで、もう一つはタレント自身に関するニュースである。この二種のニュースについて、以下の記事で説明してみたい。

①「日本のスター中山麻里が香港に到着し、映画『サインはV』を宣伝する 空港で騒ぎが起こり、サイドドアから離れた。記者会見のあと、芸能人丁桜を訪問する」

日本製作テレビドラマ『サインはV』で椿麻理を演じる東宝スター中山麻理は昨日香港に到着した。……千人ぐらいが彼女を見るために空港に行った。……彼女は「ドラマ『サインはV』は2年前の作品です。最初はそんなに人気になったとは思いませんでした。視聴者がどんどん増えるから、日本で一年間ほど放送し、3回再放送しました。このドラマが人気のある理由は多分青春の輝きに溢れ、若者の心理に合致するからかもしれません」と言った。（『明報』1971年11月19日第5版）

（「日星中山麻里抵港 介紹電影青春火花／ 機場引起哄動 由橫門離去 招待會後 探望藝員丁櫻」

在日本電視片集「青春火花」中飾演莊瑪麗的東寶女星中山麻理昨日抵港……有近千影迷跑到機場去一瞻中山麻理風采……她說：「青春火花是在兩年前拍的，最初沒想到那麼受歡迎，但一套一套的拍下去，觀眾越來越多，因而在日本放映了一年，重映過三次，這部片之所以受到歡迎，主要是充滿了青春活力，適合年輕人的心理。」

②「竹脇無我は中国血統を持ち、名門出身で弁護士資格を持っている」

竹脇無我は日本人だが、日本人に見えない。……実は、竹脇無我は100%の日本人ではない。彼の曾祖母は半分の中国人の血統を持っている。それゆえ、竹脇無我は八分の一の中国人の血を持っている。……香港における竹脇無我が数多くのファンを持っている。『結婚します』を配給する大東公司はここ数日学生からの手紙をたくさんもらった。内容は大部分が『結婚します』の正確な上映日時についての質問と竹脇無我の写真の要求である。（『明報』1972年8月24日第5版）

（「竹協無我有中國血統 出身望族有律師執照」

竹協無我雖然是日本人，但是卻沒有半點蘿蔔味。……事實上，竹協無我不是純正日本人，他的曾祖母，有一半是中國人的血統，因此在竹協無我的血液中，有著八分之一的中國血統。……在香港竹協無我也有許多影迷，連日來，發行「我想結婚」的大東公司，收到許多學生們的信，都是詢問「我想結婚」的正確上映日期及竹協無我的照片。）

中山麻里の記事は『青春火花』（『サインはV』）の人氣を十分証明した。なお、彼女の口を借り、なぜこういうような人氣を博したかの理由も述べられている。竹協無我に関する記事は一見するとナンセンスだと思われるかもしれない。竹協無我的大人氣により、このような荒唐無稽な噂も生み出された。

前述したようなタレント個人についてのニュース以外に、日本の番組を紹介する記事も少なくない。『香港電視』第430期（1976年1月30日—2月7日）では日本年末の『紅白歌合戦』を「全日本第一流紅歌星新春在翡翠台鬥唱！」というテーマで報道している。『紅白歌合戦』は一体どのような番組なのか、中継放送はどのチャンネルで放送されるのか。この記事は「這是一個極之精采、非常熱鬧的節目——全日本紅歌星大賽，「無線」已分別安排在翡翠、明珠台播映。（これは極めて素晴らしく、賑やかな番組だ——『紅白歌合戦』、「無線」の翡翠台と明珠台はこの番組を中継する）」という記事で詳しく紹介した。さらに、紅組と白組の出場する歌手全員の紹介も載せている。たとえば、「陳美齡：連這次共有三次經驗，她以「白色的襪已不合穿」這首歌參加比賽（アグネス・チャン：今回を含め、総計3回の出場経験を持っている。今回は「白いくつ下は似合わない」を歌う）」や「山口百恵：她是位優秀演員，今是第二次參加。去年她以「一個夏天的經驗」成名。今年再以此曲比賽（山口百恵：彼女は優秀な役者で、今回が二回目の出場である。去年は「夏ひらく青春」で名を馳せた。今年またこの歌を歌う）」などである。

これらの記事によって、当時日本製テレビドラマを放送することだけでは視聴者たちが満足しない事実が見て取れる。『紅白歌合戦』のような総合的な大型の番組がちょうどこの足りない部分を補足する存在であった。

#### 4.4.3 日本語学習ブーム

日本製テレビドラマと日本製品の大量輸入は、香港の市民の間に日本語学習ブームをもたらした。これに応え、「麗的」は1970年<sup>[105]</sup>「日語教室」という番組を放送した。放送時間は水曜日の午前11時15分あるいは午前7時30分であった。「無線」は「日語



【図3:竹協無我的関係記事】



講座」という番組名で1969年<sup>[106]</sup>から日本語講座の放送を始めた。放送時間は大体金曜日の午前12時であった。『香港電視』に「日語講座」の講義内容も掲載されていた。ここに幾つかの例を挙げよう。

①観光閒談（第196期 1971年8月12日—8月18日）

- 1、おたくは香港ははじめてですか
- 2、いいえ二度目です戦争中にきたことがあります
- 3、もう三十年まえのことですね
- ……
- 19、フェリーはなんじまでありますか
- 20、国際電話はどこでかけられますか
- 21、どうも色々ありがとうございました

②買免稅酒（第201期 1971年9月16日—9月22日）

- 1、にほんのぜいかんはおさけをもってかえるげんていがあります。
- 2、ホンコンにいつしゅうかんいじょうのたいざいしゃはさんぽんもってかえます。
- 3、いつしゅうかんいないはいっぽんだけでございます。
- ……
- 19、こうすい、たばこなどいかがでございますか
- 20、ええもうけっこうです

③第167期（1971年1月22日—1月28日）

一、常用動詞

いく去　かく寫　とどく到達　きく听　かう買　おもう想　はらう支付　よう  
酔……

二、實例解説

- 1、否定形  
いかないですか不去嗎……  
（尚有連接せる、れる用法專題介紹）
- 2、連用形  
いきますか去嗎……。。  
（連用形變化複雜，以上簡例外，  
另開專頁音便，複合語句）
- 3、基本形

- いくか去？……　いくでしょう去  
罷（推想）
- 4、假定形  
いけば去的話　いける能去
- 5、命令形  
いけ！去！
- 6、意想形  
いこう去啦（意象，思量）

以上の例から見ると、当時の番組で教えられていた日本語の内容は、幅広い分野をカバーしていたと思われる。たとえば、③のような講座番組を見ると、活用形に関する知識を基礎から教わることになる。なお、引用した通り、その内容も簡潔で理解しやすいものであった。また、①と②のような香港訪れた日本人との観光や買い物などについて実用性の高い会話も含まれている。これはおそらく当時日本から香港への観光客が増加しつつあったことと関係があるといえよう。

また、例文の中に、漢字・仮名交じりの表記法と仮名のみを使う表記法が存在する。漢字と仮名を混用するのは一般的な書き方だが、意図的に仮名しか用いない表記法にする理由は、おそらく読者により早く仮名を受け入れさせるためであった。

## おわりに

本論文は『明報』と『香港電視』を主な研究資料として用い、70年代に香港に輸入された日本製テレビドラマを考察対象にし、これらのドラマを分類して各自の特徴を分析した。さらに、テレビ、映画業界および日本企業の香港への進出などに関連づけ、日本製テレビドラマが香港にどのような影響を与えたのかについて論じた。ここでは、各章節の内容をもう一度振り返ってみよう。

まず、『明報』と『香港電視』の基本情報を簡潔にまとめた。

第1章は先行研究と問題提起についてである。先行研究に関しては、日本と香港におけるこの課題の研究現状を紹介した。さらに、今までの先行研究であまり触れてない点、たとえば、視聴者はどのように日本製テレビドラマを受けとめたかという問題意識に注目する理由を述べた。

第2章では、香港の放送史をラジオ放送とテレビ放送と二つの部分に分けて簡潔に紹介した。テレビ放送については、「無線」「麗的」「佳視」の三つのテレビ局の各自の特徴を述べた。「佳視」の存続年数は短かったので、本論文では「無線」と「麗的」によって輸入された日本製テレビドラマを研究対象に絞って論じることとした。

第3章では、輸入された日本製テレビドラマをジャンル別に分類した。そのうち、スポ根ドラマと時代劇にとりわけ注目した。スポ根ドラマに関して、Wong, Chi-hang[王志恒]は当時の香港の社会背景に基づき、スポ根ドラマが香港で人気を博した理由として、70年代の香港人の精神状態に合致しているからだと述べ、スポ根ドラマに反映された「頑張る精神 (Ganbaru spirit)」は広東語の「搏」と共通すると指摘した<sup>[107]</sup>。しかし、王氏はスポ根ドラマの特徴の一つである「主人公の必殺技がおよそ現実世界では実現できないこと」を詳細に分析していない。私は第4章で視聴者からの投書欄を通じてこの点について詳しく説明した。

第4章では、日本製テレビドラマの香港訳名および紹介文、視聴者の反響、香港現地の放送事業に与えた影響、香港における日本ブームという四つの視点から、香港における日本製テレビドラマの受容状況及びそれによる影響を具体的に分析した。そのうち、特に視聴者の投書から発見した日本製テレビドラマに対する香港視聴者の批判的な態度については、筆者の独自性を持っている部分と言える。そのほかに、日系企業の香港進出と日本製テレビドラマとの輸入との関連についても、現在まであまり注目されていない研究である。本論は前述した問題について追求し、問題提起を行った。

日本製テレビドラマについての研究は数多く存在しているが、それを香港の放送文化と関連付ける研究は僅かである。また、約50年前まで遡るものなので、70年代に放送された日本製テレビドラマに関する資料は散逸してしまっている。本研究は関連研究分野の文献収集・整理に貢献できたと信じている。また、日本と香港との関係は、良い時期もあって悪い時期もあったことは言うまでもない。日本製テレビドラマの香港における受容状況という小さな視角から、このような複雑な関係性が築かれた原因の一端を窺えたのではなかろうか。のみならず、日本のサブカルチャーがはるか以前から絶えず人気を集め、今はむしろ香港の流行文化の重要な構成部分となっている理由もわかった。

しかし、実は70年代以降、80、90年代の香港における日本製テレビドラマは、その輸入ルート及び形式に変化があった。従って、日本製テレビドラマの種類および登場人物の特徴なども変容していく。これらの変化の原因は香港社会の変動や香港人アイデンティティの転換などであったという指摘が先行研究でなされている。この点について、本論文ではまだ十分に解明できていない。さらに、同じく日本の植民地であった台湾における日本製テレビドラマの受容がどのような状況にあったか、香港に比べてどのような共通点と相違点が存在するのかという問題についても今回は触れることができなかった。これらについては今後の探求課題としたい。

注:

- [1] 「麗的電視」の前身。
- [2] 邦題：『隱密劍士』、1962年10月7日—1965年3月28日、TBS。
- [3] 「無線電視」に属す有料チャンネルで、2005年から「精選劇集台」、「無線劇集台」、「TVB 日劇台」という風に名前の変遷を経て、2015年12月に「日劇台」と改名した。現在では、日本製テレビドラマを中心とする放送をしている。
- [4] 查良鏞は武侠小说家金庸の名で世間に知られる。
- [5] 前身は『香港華商總會報』。1925年に岑維休、陳楷らが経営権を獲得した際に『華僑日報』という名前を変えた。
- [6] 1935年に胡文虎によって創刊された。
- [7] Richard A. and N. Anand (2004) の論文 The Production of Culture Perspective に提出した理論。簡潔に言うと、文化商品の生産は技術 (technology)、法律 (law and regulation)、産業構成 (industry structure)、組織構成 (organization struction)、職業キャリア (occupational careers)、市場 (market) のこの六つの要素によって影響される。
- [8] 中国の若者が日本文化特に日本サブカルチャーを愛好することを指す。
- [9] 吳偉明『日本流行文化與香港』（2005年，商務印書館(香港)有限公司）、69頁。
- [10] 葉嘉欣「探討日本電視劇在香港的研究理論與方法」，『香港社会科学學報』第39期，2010年秋／冬季，60頁
- [11] 小林英夫・柴田善雅『日本軍政下の香港』（1996年，社会評論社）、296頁。
- [12] 麗的呼声公司 (Rediffusion) はイギリスの放送会社の子会社である。香港のみではなく、当時イギリスの植民地であったシンガポール、マレーシア、タイなどにも子会社を立てた。「麗的呼声」という中国語は開局の際に 3,000 香港ドルの奨励金で市民から募集された。
- [13] ラジオドラマの一種。特徴は一人で声を変え、全役を演じることだ。その上、詳細な台本がなく、アウトラインしかない。先駆者が李我という人物である。
- [14] 陳雲『一起廣播的日子——香港電台八十年』（2009年，明報出版社有限公司）、32頁。
- [15] 張振東・李春武『香港廣播電視發展史』（1997年，中国廣播電視出版社）、47頁。
- [16] 譚天『港澳台广播电视』（2010年，暨南大学出版社）、7頁。
- [17] 吳昊『香港電視史話 I』（2003年，次文化堂）、3頁。
- [18] 張振東・李春武『香港廣播電視發展史』（1997年，中国廣播電視出版社）、75頁—76頁。
- [19] 『香港電視』第1号（1967年11月15日発行）、10頁—12頁。
- [20] Wong, Wai-chung, Joseph. (1978) “Television News and Television Industry in Hong Kong.” *Hong Kong: Communications Studies, CUHK*. p. 3.
- [21] 張振東・李春武『香港廣播電視發展史』（1997年，中国廣播電視出版社）、99頁—100頁。

- [22] 張振東・李春武『香港廣播電視發展史』（1997年，中国廣播電視出版社）、106頁—107頁。
- [23] 1976年に作った『射雕英雄傳』が大人気を得た。
- [24] 張振東・李春武『香港廣播電視發展史』（1997年，中国廣播電視出版社）、106頁。
- [25] Wong, Chi-hang. (2009) “From Passive Receivers to Distributing Consumers: The Changing Role of Japanese TV Drama Audiences in Hong Kong.” *Journal of Comparative Asian Development*. p. 225.
- [26] Lee, J. (1999). *Housing, home ownership, and social change in Hong Kong*. England: Ashgate. p. 132.
- [27] 呂大樂『四代香港人』（2007年，進一步多媒体有限公司）。
- [28] 香港電台は1974年から現在まで『獅子山下』を数年ごとに作っている。基本的にはこのドラマは庶民の日常生活をめぐる物語を展開し、彼らの奮闘する姿を描写する。内容は時事に密接しており、70年代高視聴率を得た。中に反映した精神は「獅子山精神」と呼ばれる。
- [29] 『毎日新聞』（夕刊）、1971年6月2日、第7面。
- [30] <https://hk.ulifestyle.com.hk/activity/detail/100510> 最終閲覧日 2018年1月7日。
- [31] 原作は昭和36年に出版された子母澤寛の『ふところ手帖』における一篇の『座頭市物語』である。
- [32] 岡崎由美・浦川留『武侠映画の快楽——唐の時代からハリウッドまで剣士たちの凄技に迫る』（2006年，三修社）、10頁。
- [33] 賈磊磊によれば、「推測できる上限は商務印書館によって製作された『車中盗』（1920年）で、下限は大中華百合影片会社の『王氏四侠』（1927年）である」。
- [34] 賈磊磊『中国武侠電影史』（2005年，文化芸術出版社）、48頁。
- [35] 原題：『書劍恩仇錄』／『香香公主』、監督：許鞍華（アン・ホイ）、銀都機構有限公司／揚子江影業有限公司）、1987年公開。
- [36] 原題：『笑傲江湖』、監督：胡金銓（キン・フー）、新寶娛樂有限公司／金公主電影製作有限公司／龍祥影業有限公司）、1990年公開。
- [37] 原題：『楊過與小龍女』、監督：華山、邵氏兄弟(香港)有限公司、1983年公開。
- [38] 原題：『七劍』、監督：徐克（ツイ・ハーク）、電影工作室有限公司／寶藍電影製作公司／華映電影有限公司、2005年公開。
- [39] 原題：『白髮魔女伝』、監督：于仁泰（ロニー・ユー）、東方電影出品(星加坡)有限公司、1993年公開。
- [40] 原題：『独臂刀』、監督：張徹（チャン・チェ）、邵氏兄弟(香港)有限公司、1967年公開。
- [41] 吳昊編『邵氏光影 武侠功夫片』（2004年，三聯書店(香港)有限公司）の前書きによる。
- [42] 監督：張徹（チャン・チェ）、邵氏兄弟(香港)有限公司、1969年公開。

- [43] 監督：張徹（チャン・チェ）、邵氏兄弟(香港)有限公司、1971 年公開。
- [44] 監督：金聖恩、威靈影業公司 / 開發電影(香港)有限公司、1972 年公開。
- [45] 『お嫁さん』はフジテレビによって 1966 年から 1970 年まで放送されたドラマで、全 7 シリーズがある。『鸞鳳和鳴』は第 7 シリーズの可能性が高い。理由はまず日本と香港での放送時間からみれば、第 7 シリーズの間隔時間が最も近いこと。次に、当時人気であった女優岡崎由紀が出演した日本製テレビドラマが数多く輸入されたことである。『お嫁さん』の第 7 シリーズに岡崎由紀も出演していた。
- [46] 石橋映里・井上剛ら『図録 / 大テレビドラマ博覧会』（2017 年、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）、10 頁。
- [47] 譚天『港澳台広播电视』（2010 年、暨南大学出版社）98 頁の内容を参考にしてまとめた。
- [48] この調査は 2001 年に行ったものである。インタビューを受けた対象の 14%が 60 歳以上の人である。テレビの普及した 70 年代には、彼らは 20 代から 30 代であった。それゆえ、2001 年に行った調査だが、結果によって 70 年代の視聴者の日本製テレビドラマのイメージについて一端がうかがえる。
- 李少南「美、日、台電視文化価値観之比較」、『新聞学研究』第 78 期、2005 年 1 月、56 頁—57 頁。
- [49] デビッド・グロスマン（著）近田政博（訳）「日本と香港における高等教育と教員養成」、『名古屋高等教育研究』第 4 号、2004 年、130 頁。
- [50] 喜多村和之『現代大学の変革と政策 ―歴史的・比較的考察』（2001 年、玉川大学出版部）、137 頁。
- [51] 原題：『半斤八兩』、監督：許冠文（マイケル・ホイ）、嘉禾電影有限公司、1976 年公開。
- [52] 監督：黒沢明、東宝製作・配給、1954 年公開。
- [53] 「正義のために死に就く」という意味である。
- [54] 千島英一『東方広東語辞典』（東方書店、2005 年）58 頁。発音記号は編著者千島英一の表記方法用いる。
- [55] 『中国語大辞典』、角川書店、1,454 頁。
- [56] 『中国語大辞典』、角川書店、3,188 頁。
- [57] 『中国語大辞典』、角川書店、2,413 頁。
- [58] 『中国語大辞典』、角川書店、3,159 頁。
- [59] 黄仲鳴「香港三及第文体流変及其語言学研究」、暨南大学、2001 年、博士論文。
- [60] 拙稿「香港における日本 TV ドラマの受容 ―71 年『香港電視』誌と 72 年『明報』紙を中心に」の一部により整理。
- [61] 羅卡・吳昊・卓伯棠『香港電影類型論』（1997 年、牛津大学出版社）、11 頁。
- [62] 入手したものは表紙が紛失しているが、正確な期数は不明だが、筆者の計算により第 217 期と推定される。

- [63] ただし、資料の制約により、全号を確認できたわけではない。私が参照したのは以下の号である。
- 第126期（1970年4月10日—4月16日）、第141期（1970年7月24日—7月30日）、第163期（1970年12月25日—12月31日）、第167期（1971年1月22日—1月28日）、第178期（1971年4月9日—4月15日）、第180期（1971年4月23日—4月29日）、第185期（1971年5月27日—6月2日）、第189期（1971年6月24日—6月30日）、第190期（1971年7月1日—7月7日）、第191期（1971年7月8日—7月14日）、第193期（1971年7月22日—7月28日）、第194期（1971年7月29日—8月4日）、第196期（1971年8月12日—8月18日）、第201期（1971年9月16日—9月22日）、第202期（1971年9月23日—9月29日）、第203期（1971年9月30日—10月6日）、第205期（1971年10月14日—10月20日）、第237期（1972年5月25日—5月31日）、第262期（1972年11月16日—11月22日）、第288期（1973年5月17日—5月23日）、第314期（1973年11月11日—11月17日）、第327期（1974年2月10日—2月16日）、第430期（1976年1月30日—2月7日）。
- [64] Wong, Chi-hang (2009) も彼の論文 “From Passive Receivers to Distributing Consumers: The Changing Role of Japanese TV Drama Audiences in Hong Kong.” *Journal of Comparative Asian Development*. p.219-242 でこの記事を使用し、70年代の視聴者の中にはスポ根ドラマにマイナス評価をする者もいたということを指摘している。
- [65] 『クロニクル東映：1947—1991』（1992年、東映株式会社）、189頁。
- [66] 井上宏『テレビ文化の社会学』（1987年、世界思想社）、140頁。
- [67] 吳偉明「香港的日本電視劇：歴史與影響」、『亞洲文化』第29期、2005年6月、183頁。
- [68] 葉嘉欣「探討日本電視劇在香港的研究理論與方法」、『香港社會科學學報』第39期、2010年秋／冬季、59頁。
- [69] 1982年1月29日—1989年9月8日；「無線」翡翠台月曜日から金曜日までの午後4時30分に放送していた。
- [70] 竇欣平『周星馳外伝』（2005年、新華出版社）、32頁。
- [71] 監督：黄柏文、萬能影業有限公司、1988年公開。
- [72] 暉峻創三監修『中華電影データブック 完全保存版』（2010年、キネマ旬報社）、98頁。
- [73] 『東方広東語辞典』、東方書店、671頁。
- [74] 張偉雄編『香港喜劇電影的自我修養』（2016年、香港電影評論学会）、142頁。
- [75] この引用は朝日新聞社が主催する辞書サイト「コトバンク」に掲載された小学館『日本大百科全書』（1984～1994刊：全26巻）をベースに毎月定期的に更新されているデジタル版「百科事典」による。（<https://kotobank.jp/word/スクリーンボール・コメディ-1346520#> 最終閲覧日2018年1月9日）
- [76] 譚亜明「周星馳現象研究」、『当代電影』1999年02期、82頁。



- [77] 邦題：『0061 北京より愛をこめて! ?』、監督：李力持/周星馳（チャウ・シンチー）、永盛電影製作有限公司、1994 年公開。
- [78] 邦題：『食神』、監督：李力持/周星馳（チャウ・シンチー）、星輝海外有限公司、1996 年公開。
- [79] 邦題：『喜劇王』、監督：李力持/周星馳（チャウ・シンチー）、星輝海外有限公司、1999 年公開。
- [80] 邦題：『少林サッカー』、監督：周星馳（チャウ・シンチー）、星輝海外有限公司 / 寰宇娛樂有限公司、2001 年公開。
- [81] 藤井省三「敗者復活の香港ドリーム 周星馳主演『少林寺サッカー』」、『ユリイカ』2001 年 11 月号、266 頁。
- [82] この記録はまた 2004 年周星馳の自らの映画『功夫』（邦題：『カンフーハッスル』、監督：周星馳（チャウ・シンチー）、北京電影製片廠 / 哥倫比亞電影製作(亞洲)有限公司 / 華誼兄弟太合影視投資有限公司、2004 年公開) によって塗り替えられた。
- [83] 邦題：『魔女の宅急便』、監督：宮崎駿、スタジオジブリ、1989 年公開。
- [84] 邦題：『シコふんじゃった』、監督：周防正行、大映、1992 年公開。
- [85] 邦題：『キャプテン翼』、高橋洋一、『週刊少年ジャンプ』1981 年 18 号—1988 年 22 号、集英社。
- [86] 原題：『西游降魔篇』、監督：周星馳（チャウ・シンチー）、安樂影片有限公司 / 華誼兄弟傳媒股份有限公司 / 中国電影股份有限公司、2013 年公開。
- [87] [http://www.cinemajournal.net/special/2014/golden\\_asia01/index.html](http://www.cinemajournal.net/special/2014/golden_asia01/index.html) 最終閲覧日 2018 年 1 月 7 日。
- [88] 監督：李力持、大都會電影製作有限公司、1994 年公開。
- [89] 監督：錢永強、新城製作有限公司 / 泰影軒製作有限公司、1994 年公開。
- [90] 邦題：『柔道龍虎房』、銀都機構有限公司 / 一百年電影有限公司、監督：杜琪峰（ジョニー・トー）/ 羅永昌（ロー・ウィンチョン）、2004 年公開。
- [91] 「銀河映客二十年 | 杜琪峰& 韋家輝：電影工業在內地才有希望」『新京報』、2016 年 4 月 8 日。
- [92] 邦題：『中国超人インフラマン』、監督：華山、1975 年公開。
- [93] 邦題：『北京原人の逆襲』、監督：何夢華（ホー・メンホア）、1977 年公開。
- [94] 趙衛防『香港電影史（1897～2006）』（2007 年、中国廣播電視出版社）268 頁。
- [95] 「無線電視」が 1971—1972 年に放送した大人気のバラエティ番組。
- [96] 原題：『結婚します』、監督：中村登、松竹映画、1969 年公開。
- [97] 陳湛頤・楊詠賢『香港日本関係年表』（2004 年、香港教育図書公司）、317 頁。
- [98] 小嶋麗逸編『香港の工業化 — アジアの結節点』（1989 年、アジア経済研究所）、146 頁。
- [99] 小嶋麗逸編『香港の工業化 — アジアの結節点』（1989 年、アジア経済研究所）、147 頁。

- [100] 葉天蔚「日本百貨進佔香港」、『広角鏡月刊』1994年1月、92頁。
- [101] 鍾宝賢『商城故事——銅鑼灣的百年變遷』（2009年、中華書局（香港）有限公司）、156頁。
- [102] 大森実監修『アジアの十字路——香港』（1965年、日本国際問題研究所）118頁。
- [103] 『日本大百科全書』によれば、「NHKの「のど自慢」は素人が歌謡曲・民謡などの優劣を競う催し番組である。ラジオに聴取者が参加する最初の番組として、1946年1月19日以来、毎週NHKから「のど自慢素人音楽会」が放送され、全国各地を回りマイクロホンとその土地の人々に開放し、ローカル・カラーを電波にのせて人気を集めた。出演者の合否は、鐘を「一つ」「二つ」および「三つ以上連打」（合格）する三段階方式で評判となり、テレビ時代に入ってから、ラジオと同時放送された」。
- [104] <http://www.cuhkacs.org/~benng/Bo-Blog/read.php?408> 最終閲覧日 2018年1月7日。
- [105] 『香港電視』には、1970年から「日本教室」が番組表に掲載されたが、詳細な放送開始日は不明である。
- [106] 『明報』の番組表に「日語講座」が最初載った日付は1970年7月12日だが、『香港電視』の第106期（1969年11月22日—11月28日）「有彈有讚」に「日語講座」についての投書が掲載されている。本論では初放送の年を1969年とする。
- [107] 同 [26] 。

## 参考文献

### 論文、雑誌記事

#### 日本語

- 藤井省三「敗者復活の香港ドリーム 周星馳主演『少林サッカー』」, 『ユリイカ』11月号, 2001年11月, 266頁
- 川辺純子「日本企業の香港復帰と香港日本人商工会議所の設立(1945～1972年)」, 『城西大学経営紀要』8号, 2012年3月, 1頁—33頁
- 周舒静「香港における日本TVドラマの受容—71年『香港電視』誌と72年『明報』紙を中心に」, 『大朋友』第1期, 2017年, 55頁—70頁

#### 中国語

- 葉天蔚「日本百貨進佔香港」, 『広角鏡月刊』1994年1月, 90頁—94頁
- 譚亜明「周星馳現象研究」, 『当代電影』1999年02期, 82頁—85頁
- 黃仲鳴「香港三及第文体流变及其語言学研究」, 暨南大学, 2001年, 博士論文
- 高橋李玉香「日劇在香港的發展及其文化意義」, 『香港社会與文化史論集』, 2002年, 97頁—111頁
- 李少南「美、日、台電視文化價值觀之比較」, 『新聞学研究』第78期, 2005年1月, 45頁—69頁
- 吳偉明「香港的日本電視劇：歷史與影響」, 『亞洲文化』第29期, 2005年6月, 182頁—197頁
- 葉嘉欣「探討日本電視劇在香港的研究理論與方法」, 『香港社会科学學報』第39期, 2010年秋／冬季, 39頁—61頁

#### 英語

- Peterson, Richard A & Anand, N. (2004) “The Production of Culture Perspective.” *Peer Reviewed Journal* 2004, Vol.30, p.311-334
- Davis, Darrell William & Yeh, Emilie Yueh-yu. (2004) “VCD as programmatic technology : Japanese television drama in Hong Kong.” *Feeling Asian modernities : transnational consumption of Japanese TV dramas*. Hong Kong : Hong Kong University Press. p. 227-247
- Leung, Yuk-ming, Lisa. (2004) “Ganbaru and its transcultural audience : imaginary and reality of Japanese TV dramas in Hong Kong” *Feeling Asian modernities : transnational consumption of Japanese TV dramas*. Hong Kong : Hong Kong University Press. p.89-105
- Wong, Chi-hang. (2009) “From Passive Receivers to Distributing Consumers: The Changing Role of Japanese TV Drama Audiences in Hong Kong.” *Journal of Comparative Asian Development*. p.219-242

Wong, Chi-hang. (2010) “From “V is the sign” to “Love generation” :how the production, circulation, and consumption of Japanese TV dramas have changed in postwar Hong Kong.” Thesis (M. Phil.)—University of Hong Kong.

## 著書

### 日本語

- 姫宮栄一『香港 その現状と案内』（1964年，中央公論社）
- 大森実監修『アジアの十字路 ―香港』（1965年，日本国際問題研究所）
- 小林進編『香港の工業化』（1970年，アジア経済研究所）
- 井上宏『テレビ文化の社会学』（1987年，世界思想社）
- 小嶋麗逸編『香港の工業化 ―アジアの結節点』（1989年，アジア経済研究所）
- 東京ニュース通信社編『テレビドラマ全史 1953～1994 : TVガイド』（1994年，東京ニュース通信社）
- 佐藤忠男『アジア映画小事典』（1995年，三一書房）
- 關禮雄（著）林道生（訳）『日本占領下の香港』（1995年，御茶の水書房）
- 小林英夫 柴田善雅『日本軍政下の香港』（1996年，社会評論社）
- 中嶋嶺雄『香港 ―移りゆく都市国家』（1997年，時事通信社）
- 沢田ゆかり『植民地香港の構造変化』（1997年，アジア経済研究所）
- 瀬川昌久編『香港社会の人類学 ―総括と展望―』（1997年，風響社）
- 石井健一『東アジアの日本大衆文化』（2001年，蒼蒼社）
- 東京放送『TBS50周年史』（2002年，東京放送）
- 岩淵功一『グローバル・プリズム <アジア・ドリーム>としての日本のテレビドラマ』（2003年，平凡社）
- 岡崎由美・浦川留『武侠映画の快楽 ―唐の時代からハリウッドまで剣士たちの凄技に迫る』（2006年，三修社）
- 岩本憲児『家族の肖像 ―ホームドラマとメロドラマ』（2007年，森話社）
- 長谷正人・太田省一『テレビだョ！全員集合 自作自演の1970年代』（2007年，青弓社）
- 邱淑婷『香港・日本映画交流史 アジア映画ネットワークのツールを探る』（2007年，東京大学出版社）
- 谷川健司・王向華・呉咏梅『越境するポピュラーカルチャー リコウランからタッキーまで』（2009年，青弓社）
- 暉峻創三監修『中華電影データブック 完全保存版』（2010年，キネマ旬報社）
- 岩淵功一『対話としてのテレビ文化 ―日・韓・中を架橋する』（2011年，ミネルヴァ書房）
- 三澤真美恵・佐藤卓己・川島真『電波・電影・電視 ―現代東アジアの連鎖するメディア』（2012年，青弓社）
- 倉田徹・張彧啓『香港 中国と向き合う自由都市』（2015年，岩波書店）

- 大場吾郎『テレビ番組海外展開 60 年史：文化交流とコンテンツビジネスの狭間で』（2017 年，人文書院）
- 石橋映里・井上剛ら『図録 / 大テレビドラマ博覧会』（2017 年，早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）

## 中国語

- 香港電視諮詢委員會『香港電視進展報告書』（1967 年 11 月—1984 年 6 月，香港政府新聞處）
- 馬傑偉『電視戰國時代』（1992 年，次文化有限公司）
- 莊義遜主編『香港事典』（1994 年，上海科學普及出版社）
- 陳湛頤『日本人與香港——十九世紀見聞錄』（1995 年，香港教育圖書公司）
- 羅卡・吳昊・卓伯棠『香港電影類型論』（1997 年，牛津大學出版社）
- 元邦建『香港史略』（1997 年，中流出版社）
- 張振東 李春武『香港廣播電視發展史』（1997 年，中國廣播電視出版社）
- 陳世光『香港大眾傳播產業概論』（2001 年，天地圖書）
- 吳昊『香港電視史話 I』（2003 年，次文化堂）
- 陳湛頤・楊詠賢『香港日本關係年表』（2004 年，香港教育圖書公司）
- 刘现成『跨越疆界：华语媒体的区域竞争』（2004 年，（台灣）亞太圖書出版社）
- 吳昊編『邵氏光影 武俠功夫片』（2004 年，三聯書店（香港）有限公司）
- 鍾寶賢『香港影業百年』（2004 年，三聯書店（香港）有限公司）
- 吳偉明『日本流行文化與香港』（2005 年，商務印書館（香港）有限公司）
- 窠欣平『周星馳外傳』（2005 年，新華出版社）
- 賈磊磊『中國武俠電影史』（2005 年，文化藝術出版社）
- 李培德『日本文化在香港』（2006 年，香港大學出版社）
- 師永剛・劉琮雄『周星馳映画』（2006 年，作家出版社）
- 呂大樂『四代香港人』（2007 年，進一步多媒體有限公司）
- 張圭陽『金庸與《明報》』（2007 年，湖北人民出版社）
- 趙衛防『香港電影史（1897～2006）』（2007 年，中國廣播電視出版社）
- 陳雲『一起廣播的日子——香港電台八十年』（2009 年，明報出版社有限公司）
- 鍾寶賢『商城故事——銅鑼灣的百年變遷』（2009 年，中華書局（香港）有限公司）
- 譚天『港澳台廣播電視』（2010 年，暨南大學出版社）
- 康寧『狂飲的奇觀——香港喜劇電影研究』（2014 年，中國電影出版社）
- 張偉雄編『香港喜劇電影的自我修養』（2016 年，香港電影評論學會）

## 英語

- Lee, J. (1999). *Housing, home ownership, and social change in Hong Kong*. England: Ashgate

## ネット資料

テレビドラマデータベース <http://www.tvdrama-db.com/>

最終閲覧日 2017 年 1 月 6 日

老餅論壇 <http://www.oldcake.net/index.php>

最終閲覧日 2017 年 1 月 6 日

知日部屋 <http://www.cuhkacs.org/~benng/Bo-Blog/index.php>

最終閲覧日 2017 年 1 月 6 日

西環的黃金歲月 <http://oceandeeop3000.blogspot.jp/>

最終閲覧日 2017 年 1 月 6 日

## 謝辞

本論文の作成にあたり、お世話になっていた方々に心より感謝を申し上げます。

論文を書いているうちに、研究方法や論文の書き方などについて、細かくご指導をくださいました指導教授、佐々木睦先生には色々お世話になりました。資料収集の期間に、佐々木先生はお忙しい中に、私と一緒に香港に行き、資料の収集を協力していただきました。論文を執筆するにあたり、自分の知識と能力が足りないので、先生からたくさんの助言をいただきました。御礼を申し上げます。

そして、研究生一年間と修士二年間に、首都大学東京中国文学の先生方のゼミへの参加を通して、研究を行う必要の基礎的な素質を身につけまして、お勉強になりました。毎回の修論指導会で、先生方々から数多くの貴重な助言をいただきました。これらの意見があったからこそ、修士論文を無事に提出することができました。先生方々のご指導に重ねて感謝を申し上げます。

また、論文を完成したあと、ネイティヴチェックをしていただきました助教代珂先生、上原かおり先輩、劉森先輩、森広江先輩に感謝いたします。論文のために、一緒に毎日深夜まで研究室で奮闘した同期生たちにも感謝の気持ちを伝えたいと思います。

最後に、母国の両親と祖母をはじめ、日本での学びを支えてくださった家族と友人にも深く感謝をいたします。ありがとうございました。